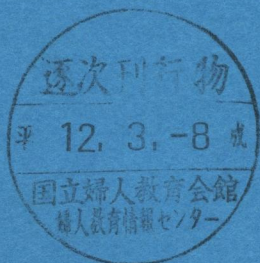


No.29 March 2000

特集 フェミニストにとっての宗教



Womanist



フェミニズム・宗教・平和の会

特集 フェミニニストにとっての宗教

宗教とフェミニニズムの出会い方	山下 明子	1
フェミニニズムと宗教——その多難な関係を克服できるか	岡野 治子	4
風は思いのままに吹く	岩田 澄江	8
「もてない女」は如何にキリスト者であり続けたか(一)	金子(真鍋) 祐子	11
シヨッキングピンク・マリア	山下 暁子	14
私にとつての宗教	支倉 寿子	20
なぜ宗教を捨てないのか	奥田 暁子	22
仏教と「慰安婦」問題——池田さんへの応答	鶴岡 瑛	26
女と国家——観念による呪縛		
A『古事記』(二三)	河野 信子	33
「宗教の殿堂」に対する幻想について	福島ひとみ	34
全てが変わった(一)	糸川 優	37
幼児向けビデオの日米比較	齋藤 元子	38
人権概念とフェミニニズム その二(下)	田ノ倉亮爾	40
書評		
80年代・女が語る	山下 暁子	43
仏教とジェンダー——女たちの如是我聞	金子 珠理	43
一九九九年活動報告・会計報告		32
編集後記		44

宗教とフェミニズムの出会い方

山下 明子

宗教の不幸

わたしが宗教らしきことに初めて出会ったのは幼児期だから、物心つくかぎり古い。親や祖父母、周囲をとおしてだった。それは仏教式の宗教教育でもあった。

日常生活に根をはった信(仰)心は、その中で育つ子どもの物の考え方に深い影響を与えるが、子どもは成長して、自分の言葉で環境を把握しようとする。親や周囲の人間の生き方への疑問と批判も生じる。宗教教育されたからこそ感情的な「宗教」否定者になる人も多い。日常的に性差別的な宗教が多いから、女性の場合とはとくにそうだと感じるかもしれない。

しかし、初発の物心とも結びついて、気になる事は自分にはつきり掴もうとし続ける人もいる。私の場合には学問にまでしている。改宗したり、他国や僻地をさまよう人も私だけではないだろう。「フェミニズムと宗教は両立しない」というような論じ方とは尺度が異なる。

わたしの歩いたかぎりアジアのほとんどの土地で、一部の都市インテリを除けば、「宗教を信仰している」などという人はいない。日本でもそうだが、religion、

宗教という言葉は、西洋からの輸入語あるいは造語だ。しかも当のキリスト教会は自分たちを「宗教」視せず、他宗教を一括的に「宗教」と呼んで否定的に扱ってきた。宗教という用語は観念化され、むしろ政治的に使われている。ふつうの人々は「宗教」というモダンな観念あるいはイズムによってではなく、その土地の民族宗教や民俗信仰、あるいはそれとも結びついた仏教やイスラームを、日常的に実践している。しかし、その実践はまた自分の所属を示す共同体的なアイデンティティでもあるから、緊張感をともなっている。

ビルマやバングラデシュと国境を接するインドのミゾラム州に先日行ってきた。一五年來の友人たちの土地だ。モンゴル系の山岳少数民族のミゾ人は、他の東北インドの諸民族と共に、インドでは部族として差別されている。しかし、ほぼ一〇〇%がクリスチャンのミゾラムは識字率もインド一で、男女を問わずに高等教育に熱心だ。このミゾラムで、女性神学者も多いというのに、いまだに女性は牧師になれない。キリスト教以前のミゾ社会の女性の地位は低かったから、大方の女性が現状に満足していることと、家父長的な教会制度がその主な理由だという。では、ミゾのフェミニストはアンチ・キリスト教かというところではない。キリスト教はインド社会で差別される彼女たちのアイデンティティであり、喜びでもあるからだ。彼女たち

は西欧的でもインド的でもないミゾの教会共同体を誇りにしており、女性聖職の問題では意見が対立しても、男性教職者を同輩・仲間として受け入れており、人間的に長老たちを尊敬している。むしろ、将来についてはわからないが、少なくとも宗教は観念ではなく、解放をめざす彼女たちと共に生きている。

フェミニズムの不幸

アジアの大宗教は、キリスト教を含めてすべて男性支配的だ。男性の政治権力とも結び付いている。このことは事実が証明しており、誰も否定できない。一方、そのような性差別ですら受容する（かにみえる）女性たちがいる。彼女たちの意見や論理はさまざまだ。フェミニズムはこれとどう対応できるか。

アジアのフェミニズムは長い間、西欧的だ、一部の特権女性のものだという内からの批判に晒されてきた。ところが九〇年代に入って、性暴力への取り組みが土着化の契機になった。性暴力は、農村と都会、階層を問わないだけではなく、国境や民族をも越えてグローバル化してきているからだ。紛争地や難民女性の問題、買春などの人身売買はこの典型だ。性暴力を肯定する女性は、私の調査のかぎり皆無で、宗教も民族も問わない。ヒンドゥーであれムスリムであれクリスチャンであれ仏教徒であれ、あるいは民族宗教やアニミス

トであれ、性暴力には反対する。

フェミニズムは人権思想と同様に近代西欧の産物だが、教条化しうるような特定の思想体系ではない。現実の性差別を問題視し、これを抜本的に解決しようとする生きた思想かつ運動だから、時代と地域、文化によつて、また解決のための戦術、方法論において、違いや差があつて当然だ。白人のフェミニズムにブラックアメリカンが異議を唱えたように、インドのフェミニズムに被差別カーストの女性たちが異議を唱える。性別役割分業の解体を中心にした日本の主流フェミニズムは、セックスツアーや「従軍慰安婦」問題への取り組みが弱いから、アジアの女性たちから疑問の声があがる。これらの多様性がフェミニズムを深めたといえる。

よく誤解されるが、多様性ということとは底が浅いということでは決してない。

伝統宗教の迷信に、自分たちの教えは普遍的で深い、というのがある。教学者の目は自足的に過去を向いているから、性差別など部分的なことだと、フェミニズムを軽視する。フェミニストのほうは頭にきて、こんなわからずやの伝統宗教など相手にしたくもない。むしろ法律の制定や改正などを求めて、政府相手に近代（世俗）的に闘うほうが、ずっと闘いやすい。性暴力と取り組むまでの、アジアの国々のフェミニズムの大方

の姿勢だった。

現在も、宗教が即共同体を意味している社会で、自分の所属する宗教共同体全体を問題視し、これとじかに闘っているフェミニストは、皆無ではないだろうがまれだ。ポストコロナアル・フェミニズムが近年盛んだが、実践レベルでの分析や思想はまだほとんどみられない。なぜアジアのフェミニズムは宗教(共同体)を全面的批判し対決ができないのか。また、いったいアジアの宗教は本当にアンチ・フェミニズムなのか。

アジアのフェミニズムの不幸は、どの宗教も自己否定の契機をもたないことと関係しているだろう。西欧キリスト教には、内に魔女狩り、外に植民地支配という、消しさることのできない歴史がある。一方、アジアの諸宗教は、過去に支配者の道具となってきたが、独立運動の支柱ともなった。女たちは外国に支配された長く暗い時代を生きるために、むしろ宗教を支えとしてきた。日本によって侵略支配され、神道を強制されたフィリピンや韓国の女性たちのキリスト教信仰も同様だ。

アジアの宗教的な女性たちには、単なる依存心ではない底深さがある。制度や教えが性差別的で、女性たちを苦しめているからといって、彼女たちの信仰が性差別を内面化しているとは必ずしも言えないことに私は気付いた。むしろ人や集団によって異なるのだが、

それはどうしてなのか。これが私の長年のフィールド研究の課題である。

フェミニズムと宗教の出会い方

私は仏教の環境に育ち、マルキシズムを通してキリスト教と出会い、さらにフェミニズムと出会い、アジアの女性たちと生の諸宗教に出会った。経路からいえば、こんなことだが、私の場合、中心的な関心はイズムや制度にはない。しいて言えば、人としての丸ごとの生き方とそれを支えうるものごとにある。

神をいのちの拠り所とするキリスト教信仰は、性差別を問題視するフェミニストの実践と、私のなかで矛盾なく共存している。かなりの時間がかかったのも事実だが、中南米で、それからインドはじめアジアの国々でさまざまなキリスト教徒と出会ったことがよかった。

キリスト教を否定して、いわゆる「西洋仏教」徒になった欧米の個々のフェミニストのケースはかなり多いが、アジアの諸国で、また他のアジア諸国とはかなりキリスト教の事情が異なる日本においても、この逆の例は少ない。つまり、ヒンドゥーや仏教やイスラーム、その他を否定して、「アジア的キリスト教」徒になったフェミニストは私の知るかぎり、ほとんどいない。また、先にも述べたように、自分たちの伝統宗教

(共同体)を西欧のフェミニストがキリスト教を否定したように否定しているフェミニストも少ない。では、誰が「西欧的」フェミニストなのか。

アジアのキリスト教の特徴は歴史的な集団改宗にある。しかもその集団は伝統宗教から差別されていた被抑圧階層や階級あるいは民族が大半だ。ところが、宣教師が去って以降、家父長的に独立し、制度化したキリスト教会は、西欧で学んだ一部のエリート支配が目立つ。宗教科人口にみても、現在、仏教徒の数よりも多く、アジアで三番目に大きい宗教ということになる。

このような状況下で、アジアのフェミニストたちは宗教から遠ざかり、これを無視するか、ミゾラムのキリスト教の女性たちの例をあげたように、自らの宗教共同体の中でフェミニズムを実践している。しかし、述べてきたようなアジアの「宗教」に生きる女性たちの現実を考えると、自らの宗教文化をよく知り、これと批判的に向き合う必要がある。そうでなければ、「西欧的」だという批判にアジアのフェミニストは対抗できないだけでなく、グローバリズムのなかで各国で深刻化している宗教原理主義的な分化の傾向に巻き込まれる恐れがある。

フェミニズムと宗教の出会い、この社会で自己の生と他者の生がどう平等につながるのか、それを具体的に求めるときに生まれる課題だからだ。

フェミニズムと宗教

——その多難な関係を克服できるか——

岡野 治子

Womanspirit 28号誌に、日比野由利氏が「宗教とフェミニズム」と題する興味深いエッセーを寄せられた。その中に私の名前が登場したこともあって、宗教とフェミニズムという矛盾に満ちた関係を私なりにこの誌上を借りて、再考させて戴くことにした。多様な主張・関心を持つフェミニストたちとの交流のなかで平素から気にかかっていたテーマでもある。ともあれこのような形でこの問題について再びアプローチする機会が与えられたことを感謝している。

日比野氏は、関西中心の「フェミローグの会」(この会は、一九九七年発展解消する形で「女性・戦争・人権」学会として再発足している)と関東中心の「フェミニズム・宗教・平和の会」の主張を比較、検討なされ、両者の根本的相違は宗教的「救い」に関する捉えかたの違いにあると結論された。私自身こうした比較を今まで意識したことがなかったので、面白い視点だと感じた。日比野氏の分析によれば、前者にあつては宗教における「救い」は即ち「抑圧(差別)」そのものという図式になっており、後者ではそれはフェミニズ

ムを目指す「解放」と究極的に一致する筈のものと捉えられている、という。旧フェミローグの会の方々が実際、宗教的救いとフェミニズム的な解放とを相対立すると考えておられるかどうかについては、外部に立つ者として結論を保留させていただく。私は個人的には、成熟した宗教が呈示する「救い」はフェミニズムの理想とも合致しなければならぬ、と考えている。その意味では、フェミニズムこそ宗教の成熟度をはかる格好の尺度になると位置づけている。いづれにしても「宗教的救い」という概念をどう捉えるかによって、フェミニズムのなかでも種々の立場が生ずる。私は「救い」という人の生の目標価値を静的ではなく、動的なプロセスのなかで捉えるべきだと考えている。すなわち伝統的「救い」の教えを現代のコンテクストに翻訳し直すプロセスを介在させるのである。イエスやブツダ、マホメットがいかにユニークな女性・弱者解放の視点を持っていたかは、今日多くのフェミニストも認めるところである。しかし彼女たちがこういった解放的な宗教者の生き方やメッセージを聖典・経典を通して知り、共感する一方で、共同体や実際の宗教生活のなかで疎外感を味わっていることも事実である。聖書、経典にちりばめられた女性蔑視の言説はもとより、伝統が作り出した矛盾も多いからである。たとえば、人々をもてなすのにおおわらわのマルタが、イエ

スの話に聞き入るばかりで手助けをしない妹マリアに不平をならす。しかしイエスはマリアの選択をより良いと評価している。ところがその後のキリスト教伝統は、マルタが体現するような家庭の領域へと女性すべてを囲いこんできたのだ。今日女性が生き方を選ぶ時、果たしてイエスはどのように語りかけてくれるだろうか。イエスやブツダの永遠の言葉に対して、現代の様々な文化コンテクストに相応しく、それぞれに言語上また典礼・儀礼上の相応しい表現が求められている。イエス像、マリア像がヨーロッパ以外の地域で、それぞれの人種、文化に相応しい形姿をとったように。

さらに宗教の説く「救い」の教えが、個々の女性や弱者を真に生かす教えとして相応しい表現をとっているか否かを一つ一つ検証することも、フェミニスト宗教者の課題ではないだろうか。宗教の創唱者、宗祖、中興者たちによるダイナミックな「救い」の内容は、その後組織化された教会、教団などのインスティテューションを通して言語的表現（聖典・教典）や典礼・儀礼的表現を獲得し、客観化されてきた。この客観化された救いの構想叙述には、当然のことながら、聖なる言葉を聖典・教典として書き記し、編纂した人々（男性）の性別、身分、世界観、その文化コンテクストが影響している筈である。宗教伝統の形成に際しても、同じ問いを発しなくてはならない。さらに聖典や伝統

を誰が解釈し、どのような受容してきたかも問い直さなくてはならないだろう。それぞれの宗教の救いに関する構想は、このように後の時代の様々な条件、支配者の価値観に左右されてきた可能性が高いのである。悪名高い「变成男子」の表現には、女性性蔑視の色調をおびた宗教的シンボリズムが作用していることが知られている。『涅槃経』に説かれる仏性は丈夫の徴、仏性を知覚できない存在は女の徴と表現されている。さらに白蓮華の清浄さを女性の子宮の不浄さと対照させるというレトリックは仏教に限らず多くの宗教に見られる女性性蔑視のシンボリズムである。宗教はこうした歪んだシンボル形成やレトリックにも敏感であつてほしいものである。

現実に女性のフェミニストにとって宗教は多くの困難と葛藤の渦巻く場であることは間違いない。しかし宗教の持つ解放の力がフェミニストたちに力を与えているのも事実である。フェミニズムは今日、性差別が他の弱者差別のメカニズムと同質の問題であることを看破し、解放のフェミニスト神学に至っては、性差別のみならずあらゆる差別という社会の不正義を糾弾し、正義の実現のために具体的構想を提示している。自ら痛みを抱えながら、さらに他の弱者に共感を示せるフェミニストに成長するためにも、宗教の本来的解放の力を味方にすべきではないだろうか。自他共に日

本フェミニズムの旗手の一人と認められている上野千鶴子氏によれば、フェミニズムと宗教はあい容れない、という（笠原芳光『宗教の森』春秋社一九九三所収の対談。二四〇頁以下）。あれ程父権的なキリスト教のなかでフェミニストたちが改良闘争をやっているのは、理解できない。何で彼女らはキリスト教を降りてしまわないのでしょうか。という上野氏の余りに素朴な疑問を私は哀しいとすら感じる。日本のフェミニズムがこういったプラグマティックな考えに代表されるならば、寂しい限りである。宗教とフェミニズムは共存可能であるし、なにより共存させなくてはならない、と思う。個々の人格形成や生の営みにとって、さらには産業の高度化と個人の孤独化が進行した現代社会だからこそ、功利主義的世界とは異なる多様な価値を開示できる宗教が、重要な役割を果たし得る、と考えるからである。しかし現代に存続する殆どの既成宗教が男性中心に教義や教説を形成、展開し、その「救い」の教え^{キリスト}その表現形態や解釈の仕方^{キリスト}にも、家父長的構造が多く反映されている事実は否定できない。宗教共同体の営みそのものは、多くの場合、女性存在を丸ごと受け入れ得るような成熟したものではない。さらに、その共同体が「誰か」を他者に仕立て上げ、その他者の痛みに鈍感であるばかりでなく、あらゆる差別を温存させ続けるならば、その共同体は「救い」について語る資

格はないとさえ思っている。そういう場においては女性を含めた弱者は「救い」を体験できないからである。

日比野氏は、宗教とフェミニズムの問題アプローチには方法論上のアポリアが存在すると次のように指摘される。「フェミニストによる宗教研究は、フェミニズムに於けるへ解放」という規範的関心の故に、方法的に宗教批判か宗教理解かのどちらかの立場に帰着せざるを得ない。その結果、宗教批判の立場をとれば、宗教理解の可能性が切り縮められてしまう可能性があり、また宗教理解の立場をとれば、フェミニストではなくなるといふことになりかねない」。しかし果たしてフェミニストは、宗教批判と宗教理解の二者択一的選択を迫られているのだろうか。私個人にとっては、フェミニズムの意識から抽出された宗教批判は同時に宗教理解を深めることに貢献するものである。一つ例を挙げてみよう。旧約聖書中の男女創造の物語にあつては、エヴァ（女）がアダム（男）から派生したと語る創世記二章のみが従来クローズアップされてきたため、女性の性が二流とされる根拠となつてきた。しかしフェミニズムの批判精神は創世記一章のもう一つの創造譚「主はひとを男と女に創造された」を再発見し、二つの物語の整合性を検討し、言語学的研究を重ねた結果、女は男の単なる「助け手」を意味したのではなく、創世の初めから女と男は、相手無しでは自己が存立でき

ないパートナー同士として解されていたことを明るみに出した。ユダヤ・キリスト教の出発点には解放的な人間観（両性観）が息衝いていたと言えないだろうか。フェミニズムによる似たような試みは、ユダヤ教やイスラム教、仏教その他の宗教でも行われており、徐々に功を奏しつつある。フェミニズムにとっての希望の光は、殆どすべての宗教に内在する暴力（性差別を含む）を告発し、将来の宗教世界のヴィジョンを開くささやかな勢力は、一つの地域、一つの共同体、一つの国の女性ばかりではないことである。メディアや交通機関の発達により、グローバルな広がりの中かで各民族、各人種の女性たちがその経験を交換し、連帯し、力を発揮できるようになった。それも女性だけではない。フェミニズムの問題はすぐれて男性のものでもあるという認識が普遍化しつつあるのは、何とも心強い。こうした地球レヴェルのうねりと他の女性・男性との連帯の可能性を視野に入れば、女性はフェミニズムを採るか宗教理解（宗教生活）を採るか二者択一ではなく、フェミニズムを通して、宗教をより成熟した共同体に成長させるのに貢献できるのではないだろうか。ここでいうフェミニズムとは、女権拡張運動の意味を越えて、弱者の視点から社会のあらゆる不条理、暴力を告発、克服しようとする思想及び運動を意味していることは言うまでもない。

フェミニズムの語る「解放」とは言わずもがな、社会文化的に定義されてきた性別役割に規定されることなく（他律的でなく）、女性も自らの意志で自己の生を形成できることであろう（自律的生）。自己形成、自己決定に際して、「人権」、「人としての尊厳」、「自律性」が保持されていることが「解放された女性」の尺度であることには論を俟たないであろう。こうした女性解放の現代的メルクマールが、イエスやブツダの革新的な生き方、メッセージにすでに息衝いていた、という再発見はフェミニストを鼓舞するものではないだろうか。

風は思いのままに吹く……

岩田 澄江

「宗教が真の意味で女性にとって救いとなるのか」と原稿依頼の文にありましたが、その問いかけは私にとつて、もはや何か異質な感じがするのを否認ませんでした。このような問いは、宗教というものが教義、儀式などであつて、それを受入れることが期待され、もしくは義務とされる場合に当てはまるような気がするのです。そうした教義や儀式を守れないこと、守るのに落ち度がある場合には、不従順な者としての罰が科

せられます。そして罰を科する者を聖職者という、とになると何か恐ろしい中世カトリック教会のイメージが浮かんできます。

ところが宗教的な罰は、何も中世の教会の専売特許でないことは言うまでもありません。オウムの恐ろしい罰の話は新聞を賑わせましたし、罰として具体的なのがが行われなくても、周囲の信者たちからの白眼視とか、これで良いのだろうかといった自分自身のおどした問いかけ、罪意識も人を苦しめるものです。なぜ苦しめるのかというと、それは自分が救いから見放されたと思うからです。人に見捨てられることも充分に恐怖ですが、宗教的な権威、神とか仏から見放されること、すなわち救いにあずかることができないとなれば、その罰は未来永劫に続くことになりますから、こんな恐ろしい、魂の凍るようなことは他には無いのではないのでしょうか。

そして、救いを与えたり、引つ込めたりする権威を握っているのが聖職者であり、それが殆どの場合男性であるとなると、女性にとつて「宗教が真の意味の救いとなるか」という問いは、父権制と決して別のことではありえなくなるのです。宗教と父権制の関係をきちんと見抜けないかぎり、女性は父権制的宗教のお得意さん、かつ犠牲者であり続けることになります。もうこんなことはいい加減で止めにしたいいのですね、

ホントに。

そこで、ここに一つの詩を掲げさせて頂きます。

石

帰りみち

私の心は石のように重い

何かに罰せられて

重い刑をおわされて

歩む人のように

灰色の石を抱いて

私はひたすら

家路をたどる

灰色の大きな石を

卵のように抱いて

何かに罰せられて

うつむいて： 帰る

これは私がフェミニスト神学に出会う以前に書いた詩で、この詩について後に私はこのように述べました。「フェミニスト神学が私にとって何であるか、と問われるならば、少なくとも右の詩のような状態からの救いであったと答えたい。」(『福音と世界』一九九〇年七月号「へ救い」としてのフェミニスト神学」から)

一端父権制のからくりが見えてしまえば、二度とそ

の陥穽に陥ること、再び「奴隷の軛に繋がれる」ことは無いと思いますが、その後に残る問いは、「それでもなお宗教に貴女は救いを求めるのですか」というものです。真実が見えてしまった時点で、多くの女性が宗教から離れていきました。それはある意味で当然でした。なぜなら、それまでの彼女たちは「騙されて」いたわけなのです。それにも関わらず、なお、留まり続けるとしたら、それは今までは異なつた貌を宗教に見つけることができたからでしょう。抑圧し、罰するのではない宗教の貌を見いだすことができた者だけが、あえてその世界に留まることができるのだと私は考えるのですが、皆さまは如何でしょうか。

では、キリスト者である私はどんな新しい貌を、この宗教の中に見つけたかをお話してみましよう。そのとき、私の考えているものを「宗教」と呼ぶべきかどうか、疑問にはなりますが。

この二〇〇〇年の年賀状に、私は聖書の次の個所を引用しました。

「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない」(ヨハネによる福音書三章八節)

この個所を思うときに、いつも私の耳にサーツと吹きすぎる清涼な風の音が聞こえます。これは聖霊についてイエスが語っているところなのですが、何という素

晴らしい比喩だろうと感嘆するばかりです。何に束縛されることもなく自由に、爽々と吹き去ってゆく風のように、そのように、霊から生まれた者もあるのだよ、と語られているのです。ここにあるのは、同じ死すべき存在である人間によつて、抑圧されたり、脅かされたり、罰せられたりすることとは対局にある、あり方です。

以前学生だったときに、私は先生のお手伝いで四福音書の中にあるイエスの言葉だけを全部、ギリシヤ語、英語、日本語で一個所づつ一枚のカードに書き写す仕事をしましたことがあります。それが終わった時に私が感じたことは、イエスという方は何と自由な人だったのだらう、ということでした。何にもとらわれることなく、それこそ風のように自由な人だ、と感じました。そして、私の心は歌いだしたくなりました。

ほんの一例をあげれば、イエスは人の前で偽善的に祈ることを戒めて次のように語っています。

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであつてはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はつきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入つて戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあ

なたの父が報いてくださる。また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思ひ込んでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」(マタイによる福音書五章五―八節)

このような言葉があるにもかかわらず、「宗教」となったキリスト教では、美しい言葉で祈らねばと、他人の耳を気にして祈ることが多くまかり通っています。あたかも私たちは、「隠れたところ」で聞いていて下さる神など存在しないと信じているかのよう。

「隠れたところ」で私たちの全存在を見つめて下さる「存在」を信じるならば、私たちはもはや人間を恐れることはなくなる筈です。そして、私たち自身が風のように自由になることができる筈です。なかなかそうなれないのが現実で、それがこの世に生きるということなのでしょうが、目標はすでにはつきりしているのです。絶えず祈ることによつて、風のように自由に一刻一刻を生きていく存在になれるということ、それが私にとつての「救い」に他なりません。

このような思いに到達するには、イエスの言葉をカードに写しただけでは駄目で、フェミニスト神学と出会う必要が絶対になりました。しかし、この真理が

分かってしまえば、いつまでも「女性の視点からの聖書解釈」というものにこだわり続ける必要もまた無いと感じつつ、これまで生きてまいりました。なぜなら「活ける聖霊」は、聖書をも越えると知るようになったからです。

「もてない女」は如何に

キリスト者であり続けたか(一)

金子(真鍋) 祐子

小谷野敦氏の『もてない男』という新書が売れている。この本のどこに膝を打ったかといえは、それは「エリート・フェミニズム」を批判した次なる一文である。「結婚制度がいけないと言ったり、『ウチは事実婚です』と威張ったりするエリート・フェミニストたちは、自分では夫や恋人を確保できる連中なのであり、そういう場から好き勝手なことを言っていると私には見える」。

氏によれば、「もてない男」とは「好きな女性から相手にしてもらえない」、「セックスの相手がいない」とによる、いわば「心身問題」としての「恋愛弱者」を指すという。そこにはまず「もてる／もてない」という権力関係があつて、これを女性に即してみると、お

そらく世に知れたフェミニストたちの多くは「もてる女」＝「恋愛強者」なのではないか、という。

正直いって、私は理不尽な性差別は断固として許せない方だが、半面、「私たち女性は：」的——我こそは世の女たちの善導者ともいいたいげな——押し付けがましい物言いや、フェミニズムの教条的な語りにも嫌悪感と胡散臭さを禁じ得ずにきた。

根源を溯れば大学時代、盛んに性別役割分担の解体を説く家庭科の教官がいた。彼女の講義は徹頭徹尾この一点に熱弁が振るわれたが、八〇年代初頭の学生たち(特に男子)といえは、まだまだ保守的で頭が固かった。私もまた別の意味で、彼女の布教を冷ややかに眺めていた一人だった。二〇歳の私は、「まあ、今まで知らなかった『性別役割分担』なんつー概念を学べたことはよかつたけどさ、でもその後は各自夫婦が考える問題であつて、誰でもかれでも『くすべし』と鑄型にはめることないじゃん」と思い、事実その考えを期末試験の答案に書いた(だって「性別役割分担についてあなたの考えを述べよ」という問題だったから)。いささか思考の古くさい大半の男子と、私みたくバカ正直者の一部女子には、あまりかんばしい成績がつかなかったことはいふまでもない。

「これは教条主義だ、思想の強制だ！」と、かすかな反感をくすぶらせていたある日のこと、『クローワッサ

ン』の誌面に彼女とその夫を発見したのである。なんでも、平等に家事を分担する京大教官の夫は毎朝、妻と並んでキッチンに立ち、子供たちは「朝からお腹いっぱいだよー」とうなっているのだとか。ほかほかのお惣菜を手にして微笑む、かの女性教官の血色よさそうなアップの写真。これを見た途端、私はひどく興ざめた。当時『クロワッサン』は、市井の女たちの蒙を啓こうとした挙げ句、彼女たちを「クロワッサン症候群」に引きずり込んだかつての話題目——「翔んでる女」だの、「キャリア・ウーマン」だの——をあつさり翻し、その反動からか、今度は家庭指向に先祖返りしていくような感じがあった。だから、そこに彼女の（家族丸抱えによる）「御用達文化人」ぶりを目にした時、私はなんだか欺かれたような気分になった。

小谷野氏の語る「エリート・フェミニズム」に接して、真つ先に思い浮かべたのがこの女性教官の件である。彼女はあらゆる意味で強者であった。第一、夫を手に入れることのできた「もてる女」であり、夫婦揃って経済力と文化資本に恵まれた「持てる者」たちである。ついでながら子供（それも男の子）も二人いるわけで、もう掛け値なし、「文句あつか?!」のエリート・フェミニストである。かたや私は、そんな彼女に反感を覚えたあの大学時代以来、いわば「もてない女」として、小谷野氏の言葉を借りれば、「もてる女」たちに

「法界格気」しながら生きてきた。プロテスタントの教会で洗礼を受けたのも、ほんのぼつちりとながらフェミニズムを学んでみようと思ったのも、すべてはこの文脈から説明できる。

フェミニズムに関してはあの女性教官をめぐるトラウマ（というには大仰かもしれないが）が大きすぎたのか、今でも「騙されないぞ」という防衛本能が働き、一歩引いて見てしまふところがある。本音をいえば、自己をフェミニストとしてアイデンティファイし、表出することは、私の中でいまだ思い切れない問題なのだ。

一方、信仰者としての部分はかなり自己同一化できているように思える。事実、私は信仰によつてさまざま「心身問題」から救われることができた。しかし今こんなことがいえるのは、教会という一社会にあつて「もてない女」なりに苦しみもがき、本気で棄教を考へるほどの信仰的試練を経て、ようやく欲しかったものが与えられたからだろう。結婚と同時に大学での職も得、さらには夫までが同信者となった現在の私は、もはや他者から見れば「もてる女」、それに「持てる女」かもしれない。あとは子供ぐらいなものである。それだけにエリート・フェミニズムの陥穽にだけは陥りたくないとの自制心が、改めて強く作動するのは至極当然のことといえる。

さて、ありていにいえば「もてない女」は教会においても弱者であり、中でも高学歴者はいつそう弱い心理的立場に追いやられる。いわでものことだが、キーワードは「結婚」である。それもクリスチャンの夫と結ばれ、クリスチャン・ホームを築くこと。「助け手」として教会のウチを守り、「婦人方」と呼ばれ慕われること。子宝に恵まれ、さらに「信仰継承」も成し遂げて、代々クリスチャン・ホームであり続けること。これぞ教会版「女の花道」である。ところが私ときたら、そもそも「結婚」の段階からしてつまずきだった。いかにキリスト教がアガペーを説く救済宗教とはいえ、教会が人間社会である限り「恋愛弱者」は生ずるのである。「もてない女」の「法界悋気」を悔い改め、鮮やかな回心とやらを体験し、あわよくば「もてる女」に変えられたいという、ささやかなる不純な願望をもって始まった教会生活は、実際に「結婚」を真剣に考えるようになった頃から、さながら無間地獄へと化していくのだった。

当時、何かと相談に乗ってくれたり愚痴を聞いてくれた人たちには心から感謝し、大事な時間を割かせてしまったことを今でも申し訳なく思っているが、そこで語られた言葉は悪意がない分、時おりひどく私を傷つけた。「あなたみたいな優秀な方に釣り合う男性はなかなかねえ……」あなたのような方は一人でも生きてい

けるのだから、他の姉妹たちと違って結婚を急ぐ必要なんかないわ」。あるいは、「あなたは理想が高すぎるんだ」「高学歴だからと自意識過剰になってるんじゃないか」「そのキャリアを無にしてでも夫に従う決心ができていいのか」……。すでに私は「自己実現」なんていう鼻持ちならない言葉を使うほど青臭くはなかったけれど、ただ好きな勉強を続けるために人様よりも幾分長く学校に通っていただけだし（大学院はそのための職業訓練校みたいなものだと思っていた）、そうするからには研究で身を立てたいと望むのは当たり前のことではないか。また論文のウケがちよつとでもよかった日には、単純にうれしかっただけである。そして、こんな私でも一緒に生きられるパートナーがほしいと、素直な願いを抱いていただけ……。だが、そうした「あるがまま」がすんなりと受け入れられず、却って断罪までされてしまう始末だった。おまけに「釣り合わないくびき」は固く戒められ、クリスチャンの夫をゲットするのが至上命題ときている。圧倒的に女性が多いキリスト教界で、同信の配偶者をつかまえられるのは、よほど幸運な「恋愛強者」にすぎないものを。

特にやるせなかつたのは、礼拝中に行なわれた「母の日」行事である。お祖母ちゃんから新米ママにいたるまで、おおよそ「母」と呼ばれる女性たち全員にカーネーションが贈呈された。望んでも子供に恵まれな

かった人たちや、三〇歳を過ぎて結婚の見通しもないまま、出産のタイムリミットに怯えるばかりの「もてない女」(つまり私のことだが)も、そこでは当然「母」をたたえる儀式に参加せねばならないのだ。力ない拍手を送っていると、そのうちに目の奥からつーんと涙が込み上げてきた。ただただ悲しく、切なかつた。胸中に募った思いは、やがて「法界恠気」と化し、「罪」となつてくすぶり始める。それは悔い改めを必要とする私個人の心の問題であり、実際、私は彼女たちを羨み、妬み、呪詛している自分自身をひどく責め苛んだものである。けれども悲しみと嫉妬と自己嫌悪を行き来する無間地獄に捕らわれながら、それでもなお、あえて叫びたかつたのである。こんな母性原理に立つた「強者の論理」なんか、礼拝中に振りかざさないでよ！と。

その頃はまた、学位は取つたものの職にありつけず、仲間たちにどんどんと置いてきぼりを食らつていた時期でもあつた。「明日が見えない不安」に取りつかれた私はうつ病になり、その後二年間は信仰か棄教かの間で揺れ続けた。それは、キリスト教信仰をめぐるアンビヴァランスのゆえに。私は、悔い改めよ、また「小さき者」に目を留めよ、といわれる神を求めようとすればするほど、却つて教會的文脈における「強者の論理」(エリート・フェミニズム)につまづきまろび、棄

教への崖っぷちに立たされることになつたのである。

シヨツキングピンク・マリア

山下 暁子

一、神様、お母様！

一年半前、私は人生開業以来一番のひどい落ち込みに入ってしまった。公私共に、とても悩んだが、「私には信仰があるから大丈夫だもんね」と、初めは思つていた。

七歳で、母と一緒にカトリックの洗礼を受けた。母は洗礼の前に二年ほど病気で、自分が亡くなることを予感して、私と洗礼を受けようとしたらしい。母の病室で洗礼を受けた。その二カ月後母は亡くなった。「あなたを、これからは神様が守つて下さるので、ママは安心して天国へ行きます」と遺書にあつた。(この遺書にも、女性信者固有の問題あり、と今は思うが長くなるので書かない)亡くなっていく母が必死で求めたもの、また、そのあとの寂しい、悲しい(まったく！)子供時代を支えてくれたのが信仰だった。

だから、そのあとの人生も、パウロの書簡、聖書の解釈、カトリックの生き方と言われるものなどに、「変」と思つたことも多々あつたが、忙しかつたし、母

の思い出も大切だったし（苦しいときは、神様、お母様、と叫んで助けを求めていたので）「変」の部分には、目をつぶっていた。また、海外でクリスチャンということ、すぐ受け入れられる経験も多くあったし、個人的には、女性的な司祭や男性的なシスター（両者とも、両性具有的で素敵だと思っていた）に出会えていて、クリスト教というのがそう悪いと思わないで来た。

ところが、どうして重なったのか解らないが、落ち込んだのと同じ頃、在籍している教会のミサがいつも、男性中心の重々しいものに変わったり、教会報に頼まれて書いた原稿を、「教会を革新する目的で、紙面ジャックしようとしている」と言われたりして——落ち込んでいたので、そんな元氣、全然無かったのに——目をつぶっていられなくなった。で、目を開いてみると、あれれ、クリスト教ってこんなだったの？「信仰があるから大丈夫だもんね」どころではなく、一層落ち込んだ。以下は、こんな年まで目をつぶっていたなんて、信じられない、という罵倒を承知での私の「クリスチャンでいる理由」です。

二、なぜ教会にまだいるのか？

「教会や信仰、って何なの？」とオタオタする私に、信者の方々の忠告は次のようなものだった。一、聖書については、「そんなこと考えても仕方ない。時代の制

約があったからだ」二、教会の現実に対しては、「この世はしよせんエデンの東、ろくでもない世の中なんだから、教会の組織や聖書についてカリカリするなんて自分が損なだけ」三、「どちらにしても、あなたは神経質過ぎる、つまらないことを気にし過ぎる」。

こういう暗い、意地悪な（恨みは深い！）助言。こういう考えこそ、私が教会について「変」と、思っていたことそのままだった。落ち込みを脱出した今の私は、このような答えに、人々がそんなにも期待しない教会になぜとどまっているか不思議だし、ろくでもない世の中でも、私は楽しく生きたいし、神経質過ぎる、と言う言葉こそ、弱い人々（落ち込んでいた時の私は、ほんとに弱かった）を撲滅する恐るべき言い方だと思う。魔女裁判、ってこういう風に始まったこともあっただろうな。

落ち込みから立ち直れた理由の一つに、フェミニスト神学に励まされたことがある。それまでも、少しずつ読んではいたが、今回は、人生を賭けて読んだ。（悲壮だった……）そして、私が教会で「変」と思っていたのは、女性が自分の感じ方や「自分の判断や知性に頼る」（註一）ことを否定されながら「謙遜に従順に生きる」環境での、当然のことだと解って（遅いけど）自分が受け入れられるようになった。現代の知性（まったく！）と、元氣さを持った人間として当然だったの

だ、と思えるようになった。フェミニスト神学に出会えて、ほんと幸運だった。

でも、変な教会と思つたら、やめればいいのに、宗教自体が（特に、私のカトリックは）権力構造なのだから、その中でフェミニストとして生きることが矛盾だと言われるだろう。「フェミニズムから見ると、男性が始め、ながく掌握し続けて来た宗教は、仏教であれキリスト教であれ、女性を理不尽におとしてめてきた。あまりに見事な女性差別の共通性に驚くことも多い」（註2）のであり、「《宗教批判については》とくにキリスト教に関してはすでに欧米のフェミニスト神学者が徹底的にやっている」（註3）のだから。

でも、落ち込みから立ち直つた今、自分の「変」と思う気持ちを口にしつつ、まだクリスチャンとして生きようと思うのは次のような幾つかの理由からだ。まず第一に、私の中で、愛や光りを求める気持と宗教を求める気持が一致していること。私だけでなく、多くの女性が（そして、男性が）そういう気持で宗教を求めていると思う。また二番目に「性による差別は、イエスによるのではなく、人間のつくつた諸制度および社会的意識に原因があると思われる」（註4）と、思うからだ。

そして三番目。既に書いたように、「何か変」と思つてから「生き残りをかけて」読み始めたフェミニスト

神学に、今まで触れたことのないほどのパワーや純粹さを感じたことだ。特に、聖書の読み替えや、初期キリスト教の研究を読むことで、納得出来ることが沢山あった。これだけの素晴らしい研究（それも、机上ではなく、考え方や人間としてのあり方、関係性をダイナミックに変えていく）を生み出したものが、女性と宗教の苦闘からだと思うと、私もまだそこに踏みとどまっていたい。そして、最後に、苦しんでいる女性が信仰を求めるところに何回も出会っているからだ。そういう女性にとつて、苦しみの中で祈りによって生き抜こうと求める場所が「教会」であると思うと（私の母がそうであった）、まだクリスチャンとして考え続けたい。「福音は、霊の力によって絶えず新しく創り変えられる平等な者たちの弟子集団としての教会であることへと呼びかけている」（註5）ことを信じたし、キリスト教が、多くの矛盾を抱えているが、でも、人間を支えてくれるものでは、と思っているのだ。

三、マリアは誰だったのか（註6）

亡くなった母の洗礼名は、マリアだった。イエスの母、マリア。

マリアは、フェミニスト神学に出会うまで全く関心が無かった、というより大嫌いだった。マリアが嫌いというより、マリアによって押しつけられる女性像が

いやだったのだ。マリアの処女性、被昇天は、長い間、私の中で考える価値も無いこととして意識の中から消えていた。真剣に議論するものとは、落ち込むまで考えてみたことも無かった。でも、直視してみると、なんて生きている女性への憎しみがあらわな考え方なんだろう。

少女の頃は私を支えてくれたはずの信仰が、女性として生きる日々には、「女性の人生は苦しくて当たり前」というマゾヒスティックな考え方を押しつけるものになっていった。当時尊敬していた司祭が、聖書の講義で女性に向かって繰り返ししたのは、「人生は誰にとつても苦しい、苦しみには意味がない。でも、それを受け入れて生きなければならぬ」ということだった。そういう言葉が、彼の文脈では、女性（それも結婚や恋愛している）だけに向けられているから抵抗感があつたのに、それが言語化出来なかつた（もう、一九八〇年代だったのに！）自分が悔しい。そして、そういう考え方の背後に必ずマリアがいた。

「マリアが処女であり、そして彼女は十字架の下に居合わせたということは、誕生場面とピエタの芸術表現によって信心の中に深く浸透しているが」（註7）と、書かれているピエタのマリアも嫌いだった。日本にも、文京区のカテドラルにある。悲し過ぎる。こう言うと、「女性だけでなく男性もこの世では涙の谷を生きていく

のだから、あの像は、人間の悲しみを表わしている」と反論されるだろう。いや、その上、「なんてひねくれているんだ。美しく、母性愛に満ちた世界的彫刻なのに。どこか、おかしいんじゃないの」と言う人だっただけだ。美しい芸術表現としてだけ存在するのならいいのだ。でも、カトリック教会では、長い間、女性のありべき姿、子供や男性の悲しみを一手に引き受ける女性、母性愛の最高表現の一つとされてきた。女性の生き方が、あのように表現されることで、私達をどれだけしばっていたか。

そして、私が日本での、「ヨーロッパの恐ろしい父性的な神ではなく、優しい母性がある神」という、よく受け入れられた考え方が嫌いだったのも、母性賛美の後ろに、マリア賛美と共通する、女性をしぼるもの、を感じていたからだ。（註8）

四、マリアは話さないのか？反省も込めて

マリアが、カトリック教会では、まだこんな風に使われている例を、反省も込めてあげる。一九九一年に出版された「解放の神学―女性からの視点」（註9）に収録された対談のシスターの弘田しずえさんの言葉。「二〇世紀末の世界に見られる重要な傾向の一つは、先進工業国と開発途上国を問わず、どこでも女が人間として立ち上がり、既存の文化伝統、社会構造に対して鋭

い問いかけと闘いを展開している事実です。『女は女らしく』という金科玉条がもはや機能しなくなっている現実があるのに、カトリック教会の中では今もってこのバチカン大使のような考えが堂々と横行していることが、大変な問題なのだけれど、問題を問題と感ぜず、むしろ問題提起した方が問題にされるといふ気の遠くなるような課題を私たちは抱えています」

バチカン大使の考えというのはアジアの修道女会議の冒頭での「マリア様は『これらすべてを心にひめ、沈黙を守っておられた』とあります。皆さん方も、このマリアに倣って」という発言だ。話しをする為の会議の冒頭で、沈黙を強いるこういう発言。カトリック信者として生きてきた長い年月、こういう言い方をされ続けてきたから、とても良く解る。同時に教会にはこういう考え方を当然と賛美する人ばかりでもあった……。「『私は昔から、いわゆるフェミニズム運動が嫌いである。昔からほんとうの実力ある女は黙って働いて来た』曾野綾子」(註10)なのだから。

シスター弘田の対談が出版されてから一〇年近くたつのに、教会の状況は少しも変わっていないと思う。反省を込めて、というのには、私も含めて教会の女性のほとんどが、こういう発言を少しも支えようとしてこなかったことだ。

「多くの男性は女性が抑圧され続けていてほしいと

思っている、なぜならばそれが男性にとって利益になるからだ。(略)男性に対して抑圧から立ち上がってくる女性に脅威を感じる種類の男性に対して、女性が平等を得ることによって彼らが失うと考えているものは、そのプラス面に比較すれば本当に表面的なことではないといふことを、説得しなければならぬと考えます」とポール・アービングは言ったが(註11)、カトリック教会では、男性の意識は勿論だが、女性達も「抑圧されている、差別されている」などと思っていないから、私は寂しい。もつとも、感じた人々(特に若い人々)は信者をさっさとやめているのかもしれない。(註12)寂しい私に、「ストップ子ども買春の会」の代表、宮本潤子さんはきっぱり言われた。「教会で、性について発言すると、まず、必ず孤立します」。私が、教会で女性問題を考えていることも「性」についてなのだから、寂しいのが当たり前なのか。せめて、宮本さんみたいに元気でいよう。

四、女性司祭が欲しい！

ところで、昨年の夏(まだ落ち込んでいた)「もー、日本には、女性司祭を望む人はいないの、神学者としてばかり活躍するシスターがどうしてないの?」と、怒っていた私が見たのが、「キリスト教と女性99」という上智大学夏期集中講座の広告。講師は岡野治子

さん。「フェミニズム・宗教・平和の会」のメンバー。と言っても、昨年入会した私は、著書は読ませて戴いていたが、個人的には知らない方だった。

すぐく暑かった八月の五日間の講義のノートは、優に本一冊分になる量。「セクシュアリティ」「処女性」など、受講生の殆どが大声で聞いたり、話したりしたことのない言葉が、岡野さんの大きな声で教室に響き渡った（ほんと、フッフ）。母性愛でなくて育命愛という言葉、解放の喜び、教会が作ってきた歪んだ女性像、現代にもある魔女裁判の恐ろしさなど、教会の、たくさん、たくさんさんの問題が、日本中からの（後ろの二人は北海道と九州だった）受講生に伝わっていますように！お隣のシスターは、最初身を固くされていた。同意出来ないとも言われた。でも最後の日には、「初めは反発したけれど、今は、なぜ納得しちゃったのかしら」と。（これも、フッフ）楽しかったのは、地方の若いシスターの教師達と、共感して盛り上がりましてしまったこと。高校の先生である若いシスター達は、これからどう教会の権威と渡り合うのかなー。

女性司祭については、周知の事実だと思うので書かない。女性司祭に関しては、カトリック教会は、まだ中世である。

最後に、最近、とつてもうれしかったこと。
先日、子供のことで深い苦しみを経験しているカト

リック信者の友人が言った。

「私、解ったの。マリアは、女であり男なのよね。」
私には、よく解った。

でも、解つてくれるカトリック教徒が、何人いるのかな!?

【註】

- 1 「女性解放とキリスト教」C・クライスト／J・ブラスカ
ウ編 奥田暁子／岩田澄江共訳 新教出版社 一九八二年
- 2 「フェミニズムと宗教第一集」あとがき「フェミニズム・平和・宗教の会」一九八七年
- 3 「フェミニズムと宗教批判」奥田暁子「フェミニズムと宗教第二集」同上 一九九〇年
- 4 「訳者あとがき」「女性解放とキリスト教」前出
- 5 「彼女を記念して」E・S・フィオレンツァ 山口里子訳
日本基督教団 一九九〇年
- 6 註7の本の題名からコピーした
- 7 「マリアがマクダレーナか」E・モルトマンⅡヴェンデル
「マリアとは誰だったのか」新教出版社 一九九三年
- 8 こういうマリア観を持っていたので、25号の平嶋さん、26号の平野さんがマリアについて書かれていたことは、とてもよく解つたように思っているのだが。マザーテレサは、私も大好きで葬儀ミサにも行ったが、マザーが

好きなのは、冷静さ、実務家の面、そして、清濁合わせ飲まない生き方からでもある。

9 「対談」富山妙子＋Sr弘田 「解放の神学」 燦葉出版社
一九九一年

10 『新潮45』一九八九年九月号 「システム論とフェミニズム」 織田元子著 勁草書房 一九九〇年

11 「女は世界をどう変えるか——国際シンポジウム」朝日新聞社 一九八六年

12 「ウラとオモテ——日本型性別役割分担と教会」山下明子「福音宣教」 一九九三年

「日本の教会は、ひとつの教会のなかに男の教会《オモテ》と女の教会《ウラ》が機能しているといえる。『性差別など、経験したことはございません』と否定する、熱心な婦人会員が多い。むしろ、この方がはるかに多いだろう」「しかし、このようなあり方に疑問を抱いたり、つまづかされて教会を去る女性も多い」

これは、一九九三年に書かれている。だが、昨年（一九九年）でも、私は「性差別など経験したことはありません」を、何人ものクリスチャンから聞いた。結婚している人からも独身の人からも。

私にとっての宗教

支倉 寿子

私は一般的な宗教について研究したこともなく、宗教学の講義を受講したことすらない。宗教にどんな意味を見いだすかという問いにははなはだプライベートルな答えしかできないことをお断りしなければならぬ。しかもこの会に入るまで私にとって宗教とはカトリック以外の何ものでもなかった。

格別の信仰をもたない家庭に育ち、宗教とは無縁の学校教育を受けた私は、大学で卒論のテーマを選ぶまでは宗教に何の関心もなく、宗教に触れる機会にも恵まれなかったのである。件の卒論のテーマはフランスのシュルレアリスムであったが、この運動が第一次大戦後のヨーロッパにおいて伝統的合理主義やカトリック教会に異議申し立てをしたということが私の興味を引いた。フランス人教師の指導を受けて調べはじめたが、とても大学四年生の私の手に負える代物ではないことがすぐ判明した。ヨーロッパの伝統をろくに知らないのに、異議申し立ての方にいきなり飛びついたのだから当然であるが。

なんとか卒論の方はでっちあげ卒業させてもらったが、ヨーロッパとりわけシュルレアリスムの根拠地フ

ランスのへ二〇世紀に至るまで、が気になって仕方がない。幸い大学院の途中で夫と共にパリに留学し、一九六〇年代半ばのフランスで日を送ることになった。この留学の私的な部分で私が経験した多くのことは、カトリック教会および信徒の集まりに関連することになる。ヴァチカン第二公会議最終年にローマへの巡礼ツアーにも参加した。

一九六〇年代半ばといえば、フランスでもカトリック教会の影響力は既に衰退していたが、第二ヴァチカン公会議がローマの制度を現代に合わせる努力を見せたことによって、前向きな空気がなかったわけではない。というようなことを今書いているが、当時の私はほとんど何も知らなかった。今持っている知識の殆どは、ずっと後になってフェミニスト的視点からカトリック教会を見直した時に得たものである。シュルレアリスムがフェミニズムに代わっただけで、またもや大学時代と同じ事を繰り返している自分にいささか呆れる。

フランスに在る間、私は多くのカトリックの信徒や神父、数は少ないが修道女に出会った。というより、親も親類もないパリで子供を持った私たちにこれらの人達が力を貸してくれたと言う方が正しい。

私自身は上記のようにカトリックはおろか宗教というものに無縁に育ったが、夫の方はどちらかかという

相当に熱心な信者であったので、私たちが遠足や旅で訪れるところも教会であったり修道院であったりすることが多かった。そこで出会った人達の中に忘れられない修道女がいる。山の中の修道院が観光地に出しているアンテナショップのようなところに彼女はいた。彼女のような目を私はかつて見たことがなく、考えてみるとその後も見ていない。

私たちを直接間接に助けてくれた人達、および眼光によって私を射抜いた修道女、それらの出会いは私をかなりカトリック教会に傾けた。

しかし、帰国後受洗にいたるまでには長い時間がかかった。一つには私にとってカトリックとは夫を通して知ったものであったから。パリに在る間には知らなかった性別役割分担が帰国と同時に我が家にも起き、その問題性がどこにあるのかを当時はよく把握できなかった私は、とにかく眼前の夫に責任をかぶせて不満をもっていたのである。夫に不満がある間は夫を通して知ったカトリックの洗礼を受ける気にはなかなかできなかった。

だがある時、教会で子供たちが世話になっていた神学生が三〇才の若さで病死するという出来事があった。長くなるので詳しくは書かないがとにかく私は遂に受洗することにした。

意外なことに（と当時の私には感じられた）受洗は

私の世界を変えたのである。今まで夫を心の中で様々に責めてはそのうち目にも見せてあげようとさえ考えていたのに、完全な存在は神しかなく、人間は夫も含めて私もまた不完全であること、不完全であることにおいてはお互い様であること、をなぜか覚ったのである。

洗礼を受けてくれたフランス人神父は大学時代の恩師でもあった。洗礼の儀式における彼の言葉が何かを引き出したのかもしれないが、確たる記憶はない。

それから一〇年後、私は、クリスチャンである自分がフェミニストとなることの（二律背反）に頭を悩ませることになる。しかし、更にそれからまた一〇年経った今私が考えるのは、宗教は信仰の問題でフェミニズムは理性の問題であるということ。宗教の場合、宣教及び維持につとめる教会・教団という組織はあるものの、信徒は自らと神の関わりをへ信じることその宗教に属するのではないだろうか。カトリック教会の場合で言えば、その存続を目して様々な言説や制度が作られてきた。それらの多くは明らかに女性差別的である。なぜそうなるかというのを問うは正を指すのはフェミニストであるが、それらの制度にもかかわらず、自らに語りかける神を信ずるのはクリスチャンである。私としては、フェミニスト的問題意識

をもってしても、カトリック教会が女性司祭を認めないからといった理由で信仰を捨てる気には今のところならないのは、私が信者になって日が浅いせいなのだろうか。そうではないことを期待しているが。

なぜ宗教を捨てないのか

奥田 暁子

わたしはフェミニストであり、キリスト者でもある。このように言うと、二律背反的な主張と聞こえるかもしれない（*Womanspirit* 28号の日比野由利さんの論文を参照）。しかしわたしは両者は対立しないと思っている。以下にその理由を書いてみたい。

わたしもかつて（フェミニスト神学に出会う前だから二〇年くらい前になるだろうか）フェミニズムと宗教は両立するのだろうかと考え、悩んだことがあった。もし宗教が女性を抑圧し、「差別構造を隠蔽」するものでしかないとしたら、フェミニストを標榜する以上、宗教者であってはおかしいということになるだろう。多くのフェミニストが宗教を捨てた理由の一つはそこにあつたかもしれない。あるいはフェミニズムによって解放されたのであれば、宗教による解放は必要ないということにもなるだろう。

しかし本当に両者は相容れないのだろうか。この問題はヒューマニズムか宗教かという問題に行き着くであろうが、エーリッヒ・フロムのように、宗教をヒューマニズムの中に含める人もいるので、ここで言う宗教の意味をはっきりさせておきたい。フロムは宗教という言葉は必ずしも神の概念や偶像と関連した体系をさすのではなく、「集団が共有する思考と行為の体系として、個人に方向付けの枠組みと献身の対象を提供する」すべてのものを指すのだといっている。この定義に従えば、ヒューマニズムも宗教であり、フェミニズムもマルクス主義も宗教ということになる。そうになると、フェミニズムと宗教を対立させる必要もないわけであるが、ここでは一応、従来通りの使い方を用いることにする。ただし、既成の「宗教」という言葉はかなり汚染されてしまっているので、もう少し広い意味をもつ「スピリチュアリティ」として考えたい。

フェミニズムは女性を解放する思想・運動とされているが、「解放」とか「自由」という言葉は曖昧である。○○からの解放と言うときは（たとえば性差別からの解放とか男性支配からの解放のように）、解放の意味は限定される。しかし人間の解放とか女性の解放という言葉にはもっと多くのものが含まれる。それは人間がまるごと解放されることである。おそらく人間として生きる上で何ものにも束縛されない、精神的にも肉体的にも完全に自由な状態をいうのであろう。それはルソーが理想としたような「自然人」を指すのかもしれない。また、自由についても、なにを自由と考えるかは人によって違うのではないだろうか。経済的になんかの不自由もなくても心が満たされない人もいるだろうし、その逆の場合もあるだろう。黒人女性や他のマイノリティ女性が問題にしたように、人種差別や階級差別から自由になることを性差別からの自由と同じほど重要だと考える人びともいるだろう。

フェミニズムが多様化し、差異化が進んだのも、マイノリティの女性たちにとつての解放が白人中産階級の女性たちの解放とは異なると気づいたからである。しかしどんなに差異化が進んでも、わたしにはフェミニズムによつて女性が完全に解放されるとは思わない。女性の解放は性差別からの解放だけではないからである。一時期人間解放の思想として最も優れていると考えられていたマルクス主義が女性解放の思想としては不完全であることが明らかになったように、フェミニズムがカバーできない領域が残ると思う。

その一つは死の問題である。最近、一人の友人が亡くなった。キリスト者であり、その穏やかで暖かい性格はだれからも愛されていた。将来を嘱望されていた有能な人で、早すぎる死をだれもが悼んだ。こういうときわたしたちは、どんな人もいつかは死ぬのだから

と達観することはできない。なぜ、こんなにいい人が早く死ななければならぬのかと、この世の不条理を嘆かずにはいられない。しかもこのような不条理をわたしたちは人生でたびたび経験する。

女性の問題でいえば、コソボで起こった女性に対する集団レイプの問題がある。わたしたちはこの問題を事後にフェミニズムの視点で解釈し、性暴力を攻撃することはできても、フェミニズムによって当の女性たちを救うことはできない。ユダヤ人に対するジェノサイドも広島・長崎への原爆投下も同じである。ユダヤ人や広島・長崎の市民は性差に関係なく、殺されたのであって、この問題に対してフェミニズムは無力である。

不条理ということでもう一つ例を挙げれば、沖縄における基地の問題がある。名護市に住む友人からの今年の年賀状には、基地問題は「アメリカの問題であったはずなのに、日本国の問題にされ、沖縄県の問題にされ、名護市の問題にされ、遂に小さな辺野古の問題に歪曲されてしまいました」と書いてあった。なぜ沖縄が、そしてなぜ名護が、という彼女の思いに対してフェミニズムはなにができるだろうか。このような問題に対してもフェミニズムは（今のところ）無力ではないだろうか。

おそらくこのことがヒューマニズム（人間中心主義）

と宗教を区別するのであろう。合理的に考えれば、人間存在がすべてであり、人間の理性ですべてが解決できるということになるはずだが、前述のさまざまな不条理については理性のみではどうすることもできない。もっとも、最後の問題については、今のところは無力であっても、フェミニズムが取り組まなければならぬ問題であると思う。友人もエコロジカル・フェミニズムに期待していると書いていた。

さて、自分のことに話を戻せば、わたしがフェミニズムに触れたのはキリスト者になってから一〇数年経った頃であった。当時わたしは聖書の中に記されている女性差別的記述やキリスト教社会に見られる男性中心の制度や思考に疑問を感じていたが、そのような女性の思いを女性のわがままとしか受け止めない周囲のキリスト者の姿勢に不信感を募らせていたから、フェミニズムに触れたときはもやもやしていた気持ちが一気に晴れる思いがした。フェミニズムは、わたしが感じていた思いはわたしひとりの個人的な問題ではなく多くの女性が同じ問題を抱えていること、今日の女性の置かれている状況は歴史的につくり出されたものであることを明確に教えてくれた。しかしフェミニスト神学に接するまでは、キリスト教批判を公然と口にすることはできなかった。フェミニスト神学によって聖書そのものにも性差別思想があることや聖書の一

字一句を神の言葉として絶対化しなくても良いことがわかったのは、大きな救いだ。制度としてのキリスト教が家父長制宗教になっていることもわかった。

しかしだからといって、わたしはメアリ・デイリーのようにキリスト教を捨てようとは思わなかった（デイリーの場合もキリスト教を断固として否定しているが、女神信仰を高く評価しているのであるから、宗教性やスピリチュアリティは否定していないように思う）。制度としては歪んでしまっているが、キリスト教の本質はイエスにあると思うからである。聖書を読むたびにわたしはイエスの言葉や行動からインスパイアされることが多いし、イエスの生き方そのものから大きな示唆を受ける。とくに小さなもの、弱いものを愛するイエスの隣人愛の視点、それとは逆にこの世の権力や権威を徹底的に憎み、批判する視点。これと同じ視点をもち続けることは不可能かもしれないが、イエスはわたしにとって生きる指針である。

壮大な歴史を語る旧約聖書から教えられるのは歴史の中に人間を超える存在があることを信じていることである。そして抑圧された人を解放するのが神の義（公正）だという思想である。人間を超える存在というとき、キリスト教ではそれを神と呼ぶが、別の言葉で呼ぶ人もいるだろう。自然宗教を信じている人なら、それは森や川や山など、自然物であるかもしれない。とくに

宗教を信じていなくとも、そのような存在を肯定する人は多いのではないだろうか。いずれにしても、人間を超える存在を信じるとき、人はどんなときにも絶望してしまわず、未来に希望を持つことができるように思う。実際、宗教が困難の中にある人びとを奮い立たせた例は多い。奴隷制廃止運動や公民権運動に参加した黒人たちの原動力になったのはイエスの言葉と黒人の共同体である教会であったことはよく知られている。黒人解放の神学者のジェームス・コーンが言うように、黒人の解放の闘いの根拠にあったのは神が人間を自由にしたという認識であった。「神との交わりが人間解放のはじめであり、終わりである。」（コーン『抑圧されたものの神』）

女性に対する抑圧をはねのける力を得るためにフェミニズムは必要である。しかし「解放」の意味が狭く解釈されると、すべての女性、とくに最も抑圧された女性の解放の思想とはならない。エリザベート・モルトマンⅡヴェンデルも言うように、女性のアイデンティティだけにこだわると、硬直したフェミニズムに行き着いてしまい、しかも多くの女性の現実に衝突して座礁してしまう。今日のフェミニズムにすでにその徴候は見えていのではないだろうか。

そうならないためには、自己を相対化する視点、自己を省察する視点が必要であるが、人間中心主義から

はその視点は出てこない。相対化するためにはなんらかの超越的基準が無ければならないからである。キリスト者にとってその基準となるのは神の存在であり、イエスの言動である。

最後に宗教批判と宗教理解についても、わたしは両者は対立しないと思っている。フェミニスト神学が伝統的なキリスト教を批判するのは宗教を否定するためではなく、むしろその反対である。宗教が女性にとって本当の意味での解放の思想となるために、宗教の中にある家父長制的体質を批判するのであって、宗教批判は宗教理解の一つのプロセスであるとわたしは捉えている。

仏教と「慰安婦」問題

——池田さんへの応答

鶴岡 瑛

前号池田さんの『「慰安婦」問題から見た日本人と仏教』を読ませて戴きました。戦争責任の問題がいつこう進展しないばかりでなく、この厳しい不況の陰で「保守回帰」をもくろむ危険な潮流が力を増していることを危惧する者として、へ日本人ってなんなのだろうへ「この日本の風土を動かしているのはなに？」という思

いは私にも共通していますで「宗教（仏教）」のはたした役割」を問いたくなる気持ちもわかります。でも仏教についても「慰安婦」問題についても、気になる点がいくつかあります。

まず仏教について。スリランカ女性の例は、仏教というより在来の「輪廻思想」の影響が強いものと見た方がよいのではないでしょうか。釈尊の教えにはないものです。同様に仏教の「諦観」は明らかに見ることであって、「あきらめる」ことではないのです。

スリランカでも最初は尼僧教団が存在し、女性が成仏することが認められていたはずですが、後に社会に女性差別が激しくなると、女性は出家することも成仏の可能性も認められなくなり、現世ではひたすら僧侶に供養し善行をして、来世で楽な境遇である「男性」に生まれることを願うしかないという方向づけられたものと思います。

「親鸞に罪の概念が希薄」というのもまったくの誤りです。親鸞の思想をもっともよく表わすものとして「罪悪深重の凡夫」という言葉があります。凡夫（ただひと）仏ではない普通の人間）とは、状況次第でどんな悪事でもする人間のことで、悪人とはそのことを自覚した人間ですし、善人とは「私は悪いことをしたことはないし、これからだってしない」と考える人の

ことです。

親鸞は悟りすました高僧顔をするのを嫌いました。晩年のご和讃の中に「愚禿悲嘆述懐」というものがあります。へ愚禿とという名のりは、自分は僧という名に値する者ではないが、仏法によって生きる者である、というところから選ばれたものです。

その中でへ浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし 虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし×悪性さらにやめがたし ころは蛇蝎のごとくなり——略とわが身を悲嘆されています。罪の自覚が深いから悲嘆も深いではありませんか。さいわい真宗学では源さんが専門家のはずですから、ぜひお聞きになってください。

仏教のはたした役割について池田さんはへ仏教が悪影響を与えたといいますが、私は反対にへ仏教が十分に影響を与えられなかったと考えます。

この食い違いは、私は教えとしてのへ仏教と、教団・寺院・僧侶の形づくるへ仏教界を分けて考えるのに対し、フェミログ系の方々はへ坊主憎けりや袈裟までも式に、へ仏教界に問題が山積している。それは仏教がよくない教えだからだ」と両者を一つにして断罪するからではありませんか。

いうまでもなくへ真理は形を持ちませんし、へ仏教界は現世の存在で、無謬ということはありません。

この構図はどの宗教においても同じでしょう。だからへ仏教界は自らを開かれたものとし、内外の批判を受けいなければならないわけですが、現実にはそのようになっています。ですから私にはへ仏教界を擁護する気持ちはまったくありません。

私のへ仏教界への批判の第一は、寺院が伝道機関としての機能を十分に果たしていない点にあります。毎日曜日に礼拝や祈祷会などの集まりがあるキリスト教に比べ、僧侶が自分の信仰や見解を檀家・信者に伝えるパイプはほとんどないのが実情です。本業の仏教についても不勉強で社会経験も乏しい僧侶も多いので、檀家・信者の側も日ごろから僧侶を精神的指導者として仰ぎ、何かあれば寺に相談を持ち込むということも、残念ながら少ないようです。日常活動が不足であり、地域社会に根を下ろしていないのです。

仏教には社会性が足りないという池田さんの批判も、私が本当のへ仏教が十分に影響を与えられなかったと考える根拠もこちら辺にあるのではないのでしょうか。ただこうしたことは長い歴史の中で形成されたもので、社会的な活動を志す僧侶・寺院があっても、なかなか地域の理解や支援も得られず、隣の寺・教区・教団へと運動が広がりにくいのです。

これはキリスト教の運動についても同じでしょうが、社会全体のへそんなことは宗教のやることじゃない

へ慰安婦問題は過去のことだ〜という無理解が壁となつていて感じます。その辺のことは前回池田さんの呼びかけに応え、参集・協力した僧侶・寺院もあつたはずで、よくご承知のはずです。個人としての僧侶・寺院の力不足を責めて、解決のつくことではありません。へだから仏教が悪いのだ〜とおっしゃるかもしれませんが、日本の仏教界が現在このようであるのは、仏教界側とその時々々の為政者や檀家・信者、社会全体が長い時間を掛けて形成したもので、仏教者にだけ責任を負わせることはできないと考えます。たしかに中国の仏教者と比べても日本の仏教者に、僧伽の自治・独立を守る精神が乏しく、常に権力者の愛顧を求めがちだったということは認めねばなりません。

池田さんご自身論文の中で、ほどの疑問についても仏教だけの問題ではなく儒教や神道の影響も大きいはずだ〜といわれていますが、私はその他に人間を動かす要素としての政治や経済や日本固有の国民性・風土性の影響も見逃せないと思います。

仏教は日本に導入されたそもそもから政治の支配下におかれ、ことに律令制度の体制に組み込まれる形で、仏教制度そのものが形成された経緯があります。徳川幕府の宗教政策、国家神道を柱に天皇統治の新体制を

樹立した、明治新政府の宗教政策の影響も甚大なものがありました。

経済が社会に及ぼす影響の大きさは、高度成長の枠を踏みはずしたバブル時期とその後の不況期が、どれだけ社会や人心を荒廃させたかをいま私たちは実感している最中でしょう。日本が先の戦争に雪崩こんだ大きな要素としての、昭和初期からの不景気の影響も見過すことはできません。

それも明治政府が強行した（富国強兵政策）、ことに国力不相応の軍備増強政策によって、社会福祉や社会資本の充実は後回しにされ、国民の権利は制限され、国民生活は貧しさを強いられてきた無理の延長上にあったものです。そうしたもののへの不満をおさえるため思想取締りが強化され、従順で疑いを持たない国民を作るための教育制度に力がいれられました。こうしたものの一環として宗教（仏教）対策もあつたのです。こうしたからみあつた要素の中で、日本の国民性、風土性というものと仏教との関係をどう考えたらよいのでしょうか。仏教よりはるかに強固な枠組みを持つキリスト教さえ、日本の風土性に遭っては変質をこうむつたと遠藤周作氏は指摘されました。現在キリスト教は新しい信者の獲得という点では頭打ち状態にあると聞きます。仏教は（良し悪しは別として）社会の求める方向へ変容する柔軟性があるためか、いまでも新

たな宗派・信者を生み出す温床となりうる潜在力を残してきます。ようするにいまとなつては仏教と風土性のどちらが相手により大きな影響を与えたか知ることができないでしょう。

ここでは性風俗と仏教がどのようにかかわったかに限って見てみましょう。仏教では出家者は異性と交わることは禁じられました。在家信者に対しても不邪淫戒という言葉でよこしまな性行動を戒めました。しかしこれが厳密に守られたとは思えません。

たとえば公娼制の敷かれた社会で、既婚男性が買春をすることは、家業もきちんとこなす妻子にも十分なことをしていれば、不邪淫とは見なされず、金銭で女性の心身を売買する制度そのものも、必要悪として見過ごしにされたことでしょう。けれども売笑制度が社会の安寧を守るための一種の安全弁として、建前はともかく裏では黙認されているというのは、仏教だけでなくキリスト教を始め世界の宗教に共通することではないでしょうか。

宗教の違いによって国民の道徳的なレベルが違うとはなかなか私には信じられません。

キリスト教社会の間でも、国によって、時代によって、事柄によって反応は違います。たとえば原爆を投下して、多くの非戦闘員まで残虐に殺傷し後遺症を残

した責任についての、アメリカ国民の過敏な反応を見ても、キリスト教国であればすべて自国の非を誠実に認めるわけではないようです。日本における米軍基地関係者の犯罪についても、同じことが感じられます。要するにこうした諸要素の中でヘキリスト教対仏教という対比をすること自体無意味と感じられます。

〈慰安婦〉問題に関する二つの疑問について

私は〈慰安婦〉問題について不勉強で、支援にもかかわっていないので、発言する資格はないのですが、池田さんの疑問について個人的な感想を言わせていただきます。

へなぜ日本人慰安婦が名乗りでないのかという問いかけそのものに、私は驚かされました。ここに〈慰安婦〉とされた人たちの二重の意味での悲惨さが露呈しているからです。

日本人の〈慰安婦〉は例外もあるでしょうが、大方がそれ以前から売笑をなりわいとしていたプロであったこと、そうしたプロには性病もちが多かったから、それを避けるために植民地の年若いしろうと娘が狩り出されたり、外国女性の受難が倍加されたということ、周知の事実ではないでしょうか。

日本人慰安婦についても気の毒な事情があります。多額の前借を背負って芸娼妓となった弱い立場の彼女

らは、抱え主の会計の不正や、衣装、食費、身の回り費用などの水増し請求などで、働けど働けど借金の減らない仕組みの中で搾取されていたので、へ多額の前渡金が出るなら〜と決断せざるをえなかったのでしょう。自分の意志でなかったからといって彼女らが〈慰安婦〉制度の犠牲者でないとはいえませんが、植民地人や外国人で〈慰安婦〉を強制された人々とは少し立場が違います。

もし彼女らが謝罪や補償を求めて名のりであれば、それこそへ商行為として承知でなつたくせに〜という非難が同胞からあびせられ、社会から爪はじきされるでしょう。彼女らはへ名乗り出ない〜のではなく、へ出られない〜のではないのですか。

池田さんのいわれるへ責任者の処罰〜にも問題を感じます。第一に責任者の範囲をどう定め、どのように処罰しますか。というのも戦後処理に関してよく日本と対比されるドイツの例をみれば、その第一歩に大きな相違があります。

ドイツにおいては戦争が終結する以前に戦争指導者のヒトラーは自決し、他の指導者も連合軍によって戦争犯罪者として法廷に引き出され処罰され、逃亡し追及を受けました。

旧大日本帝国陸海軍においては、へ上官の命令はすな

わち朕の命令と心得よ〜の言葉の下に、下級将校・下士官までが下の階級の兵に対し、絶対的な権力がふるえたのです。すべての軍人が上官のどんなにむちゃな命令に対しても、反抗はおろか疑問をもつことすら、軍隊組織の頂点に立つ天皇に対する不忠であると思うよう仕向けられたのです。ですから旧軍の内務班における無法なへ私的制裁〜もここから生まれています。これを素直に受け取れば昭和天皇が日本軍の最高指導者ということになり、最終責任者になるということではありませんか。

池田さんは以前〈慰安婦〉制度を「天皇の贈り物」と書かれましたね。私は天皇が慰安所設置に関わられたとは思いませんからとてもそういうことはいえませんが、〈慰安婦〉問題の法制上の最終責任は、昭和天皇に帰すると考えます。その天皇が（キリスト教国の）占領軍によって戦争責任を免除されました。彼らにそれをさせたのが、宗教的理由でなく、政治的理由であるのは明白ですが。

ですから戦勝国による東京裁判はもともと茶番（ショー）でしかなかったわけですから、一般国民もなにして天皇が免責されているのですから、自分たちのしてきたことを真剣に反省するわけがありません。元兵士に加害のトラウマが少ないというのは、この辺に原因がありそうです。天皇にさえ戦争責任がないとすれ

ば、一兵士の自分たちに責任なんかありつこないと、自分で自分を免責する心理操作が働いたと考えられます。このことはまた戦後社会の無責任体質に、はかりしれない影響を及ぼしたものと考えます。

こんなわけで私は、昭和天皇の戦争責任を問えなかつたこの社会がいまとなって、大局の中では小さな歯車でしかなかった責任者（大半はすでに死亡しているか非常に高齢化している）の生き残りを法廷に引き出そうとするのは、あまりにも公正を欠くと感じます。

国家による謝罪・補償を別として、日本国民が行つた加害をもつともよく償う方法は何か。私は〈責任者処罰〉より、過去の歴史に学び二度と同じ事態をひき起こさぬよう、私たちの社会を変えなければならぬと感じます。

この点について先ごろまで私は、いまの日本の社会は戦前に比べはるかに平和な非暴力体質社会であると楽観していました。ですが近頃頻発する意味のないような暴力・殺人事件や、つい先ごろの西村元政務次官の発言によって、それが誤りであると知らされました。社会の底流・人の心の奥に、すぐに暴力へと短絡するへいらだちが充滿していると感じます。

またどういふわけか西村氏のような（たとえそれが〈防衛のため〉と断り書きがつこうと）軍備増強論者に

は、女性蔑視の観念が強いようですね。暴力と女性蔑視、この二つには切り離しにくい近縁性があるようです。また暴力は男性性の誇示と権力志向とも結びつくようです。とすれば戦争という暴力の極が必要とされる際に、女性への性的な加害が誘発される道筋も見えてきます。

理性の歯止めがはずされる戦争や紛争がいったん始まれば、こうしたものへの暴走を防ぐ万全の方法はおそらくないでしょう。兵士による敵国婦女への加害を防止することを、目的の一つとした〈慰安所〉設置も、必ずしもそうした効果を上げられなかつたという事実は、そうした加害行為が単なる性的充足とは別の動機でなされる、という推測を裏付けるものであると思われまます。

古来どの国であっても、兵士のあるところ買売春はつきものでした。平時であつても兵士に適した生命力盛んな年齢の人たちを集団で拘束し、不自然な生活を強いるのがそもそも無理なのではないでしょうか。

また日本軍の兵士は兵士の中でも、極度に人間性を無視した自由のない緊張を強いられる状況に置かれていたと考えられます。ことに昭和の一〇年以降は不景気が社会を覆い、宣戦布告のない戦争状態ええ事変の拡大・継続によって、兵役適格年齢の男性たちの間に前途に希望の持てない捨て鉢な気分が横溢していたと

いわれます。他国に類を見ないといわれる蛮行は、こうしたモロモロを背景としていたことを、せめて私たちは知るべきでしょう。

こうした背景―不況や政治家の墮落と無力さからくる混乱や前途への光明の見いだしがたさは、かなりの程度いまの世相と重なりますので、私は怖しくてならないのです。宗教に関わるものはいま宗旨・宗派の違いを越えて協力してこの世相に立ち向かわなければならぬのではないのでしょうか。その意味からもうこうしただキリスト教対仏教という取り上げ方は無意味であると感じます。ご再考をお願いします。

〈訂正〉

前号（No 28）P8で「真宗大谷派における女性差別を考えるおんなたちの会」の発足が一九九六年となっていますが、一九八六年の誤りでしたので訂正します。

1999年活動報告

2. 7 例会「ジェンダーの視点から見た近代国家と宗教」
講師 源淳子
- 3月 Womanspirit 第27号発行
6. 26 例会「女性と宗教・幻想の関係について」
発題 檜村愛子
- 6月 『フェミニズム・宗教・平和』第7号発行
前年のシンポジウムの報告書
9. 2 例会「教会と男女のパートナーシップ」
発題 山野繁子
- 9月 Womanspirit 第28号発行
10. 27 『毎日新聞』（関西版）に Womanspirit 第28号の紹介記事
（例会は支倉寿子、平野裕子、中野優子さんが担当してくださいました）

A 『古事記』(二二二)

河野 信子

若い女 「愛縛清浄句是菩薩位」。しかし対称性の破れ。

老婆 何のことを言つてなさる。さきの「中間の性」(28号参照)を気にしていなさるのか。

若い女 人類は、両性具有も中間の性も、いまだ深い思弁のもとにとらえてはこなかったように思います。

老婆 プラトンは『饗宴』でいかにもアリストフアネスがいいそうなこととして、両性具有は傲慢だとい

い、『とりかえばや物語』(平安後期)では、男性性を女性に、女性性を男性に教育によって植えつけてはみ

るが、いずれも好色の餌食になるといい、ヴァージニア・ウルフは『オーランド』で、男性から女性に変わった三六〇歳にして三六歳の女性を中心に据えて社会性

と時代性のなかの、女と男の関係の変転を省察していますが。

若い女 ひと口に両性具有といっても、これが文学世界にあらわれる、あらわれかたはさまざまございませう。

前二例は、やはり男性の作品で、『オーランド』は

なるほど女性の作品だと思わされます。

老婆 省察の深度の男女差とみるか、フェミニニズムの進展の時間とみるか。これは今後の研究課題でありませう。

若い女 では、『古事記』垂仁天皇の段に入る前に、ちよつと『饗宴』のつぎのくだりをお聞きくださいませ。(読む)「かくてわれわれは、いずれも人間の割符

に過ぎん、比目魚ひらめのように截り割られて、一つの者が二つとなつたのだから、それで人は誰でも不断に自分

の片割れなる割符を索める。だから、かつて男女おめと呼ばれた双形者の一半に当る男達はすべて女好きである」

(久保勉訳・岩波文庫)

老婆 その先に同性愛者への言及がつづいていゝはずです。同性愛者の話はいずれ別の機会に語り合うことにして。垂仁天皇が女好きだというわけですか。

若い女 垂仁天皇だけではないのですが……ともかく、原始古代の一夫(？)多妻状況に頭がくらくらいたします。サハヂヒメ・ヒバスヒメ・ヌバタノイリビメ・

アザミノイリビメ・ヤグヤヒメ・カリバタトベ・オトカリバタトベが多妻群をなし、子たちはおよそ十六人。

老婆 この多妻状況を、征服譚の『古事記』型の表現と見ることもできます。しかし、いまは表現の文学

性のほうに傾くことにいたしましょう。

周知のとおり沙本毘売サホトヒメ(サハヂヒメのこと・比売・

毘売・日売と表記は三様である)の「愛の物語」となっていますので、そちらを考慮することにいたしましたしょう。

この天皇、女好きではあるが移り気とは書かれていません。また妻たちの間に、地位の差は、あるのかなのか、言及されてはいません。

若い女 いまどきの浮気男のように、つぎつぎに妻を作るは、妻である女が、「つまらない女」だからなどとも書かれていません。

老婆 『古事記』には、何故か「つまらない女」がめつたに出て来ません。これがまた、古代人の精神のありようを解く、ひとつの鍵かもわかりません。対称性の破れとはそのことですか。

若い女 いえ、天皇一人対多数の妻のことではございません。対称軸がめぐるしく入れ替るのです。夫と妻・兄と妹、ついでまた夫と妻といったように。

夫の寝顔に涙を流す沙本毘売、兄のもとに走り去るヒメも時代の転換期あるいは移行期のメタファでしょうか。

(この項つづく)

「宗教の殿堂」に対する幻想について

福島ひとみ

経済評論家の佐高信が、「宗教者にとって宗教とは「生活」なのである」と言っている。(この場合宗教者とは「浄財」や「寄進」を貰う立場にいる人間を指す)。私はこれを読んだ時、目から鱗がおちるというか、自分の思い込みがまったく間違っていたのだということを知った。「教会に近付けば近付くほど、神からは遠ざかる」という箴言を思い知ったのである。

私は一九八〇年から二年間、奈良の天理教本部で過ごしたが、本部に飛び込んだ理由というのが(古都奈良京都をまわれるという邪心もあるにはあったが)、本部に行けばどんなに素晴らしい信仰者に出会えるだろうかという素朴な期待によるものであった。それが二年後に本部を去る時の心境とあったら、「脱出」というにふさわしい惨憺たるものだった。二年の間に、真綿で首を絞められるというか、言うに言われぬストレスに晒され、私の精神は甚大なる損傷を受けて、それはいまだに完全に癒されずにいる。それが、「どんなに素晴らしい信仰者」という私の理想と、「こんな腐りきった本部に真の意味での信仰者などいるはずもない」という現実の落差の大きさによるものだということ

とが、佐高信の言葉に出会うまで、分からなかったのである。「宗教の殿堂」で暮らし、「淨財」や「寄進」で生活の糧を得る人間に、そもそも「信仰」を求めるところとそれが間違っているのだということを、理解しなければならなかったのである。働かざる者が「食う」状態がどれほど不健康で不衛生なものか、知悉しなければならなかったのだ。

その私の体験を吐露した本誌26号の文に対し、反論があった。名指しで反論するまでもないのでそれは避けるが、主に要約すると二つの論点に集約される。私が本部勤務の女の子（その殆どが教会の子女）に対し、「金を取らない売春婦」という表現を奉ったことを、経済学的に厳密な意味で間違っている、という指摘を受けたが、それはその限りで正しいにしても、私は比喩的な意味で使ったのであって、教会出身で本部勤務をする女の子達の生き方そのものを問うたのである。私が二年の本部勤務の間に出会った女の子達の口から、宗教の第一義的な動機である「世直し」に関する言志を聞いたことは一度もなかったし、教祖中山みきの厳しい生涯に言及した会話もなかった。彼女達の頭を占める関心事は、まず条件のよい男を捕まえること、それによって安定した生活を得ること、そのためにはどんな手段でも選ばない、ということであって、これが「売春婦」でなくして何だろう、と私が情けな

く思ったゆえんなのであり、これは本部が教祖の意に反して殆ど捏造した教理に原因がある、と結論を下した理由なのである。「女は道の台」と洗脳し、女性から徹底して主体性を奪うことによって、天理教の中の女を「性の玩具」たらしめていたとしたら、まったく皮肉な結果であるとしたか言いようがない。もつとも田嶋陽子の論を借りるなら、男から見れば女は「穴と袋」であるそうだから、根底の所では社会全般の女の規定のされ方と大差はないようだが……。

また、本部勤務の子女には篤実な信仰心に燃えている者も多い、という意見もあったが、私自身は二年も本部にいてそうしたお方に巡り合ったことは一度もないから、その説は信憑性にとぼしい。それに本部がそうした人間で溢れているなら、天理教は現在繁栄している一方のほうではないか。それなのに私の耳に入ってくる情報は、教勢も「寄進」も減退する一方だということばかりである。要するに、極端な例をいうなら現在天理教本部がこの地上から消えたところで世界はちっとも困らない、というのが本部外で生存する私の見解である。しかし、中山みきが目指した「世直し」に邁進する天理教は、決してそんなものではないはずである。

私が直言したいのは、「現実の社会の苦悩」に向き合おうとしない本部の怠慢であり、中山みきの主義主張

からあまりにも外れてしまった本部という組織の墮落と腐敗である。なぜ天理教は「世直し」の原点を忘れてしまったのか。明治天皇制政府に敢然と立ち向かい、「たった一人の反乱」を試みた中山みきの「ひながた」を思い、天理教の未来を真に憂えるからこそ、あえて苦言を呈する所存である。

私が、天理教徒として生きていこう、と決意するにあたって、重要な契機となった文章がある。ドストエフスキの『カラマゾフ兄弟』はお読みの方も多から御存知の箇所かとも思うが、これは「世直し」を目指す宗教者にとって暗示に富んだ文なので、引用する。『カラマゾフ兄弟』とは私生児スメルジャコフもちろん含まれているが、彼に殺されるフォードル・パーヴロヴィッチの仇敵である知性人ミウソフが、最初に出てくる僧院の場面で知識を披瀝する。

「あれは十二月革命の直後ですから、もう何年前かのパリでの話ですが、ある時のこと私は、非常に重要な地位についていた、かねて知り合いの当時有力な政治家の家を訪問したことがあります。そこで私はあるきわめて興味ある人物に会ったのです。その人物はただの密偵というわけではなく、まあ秘密警察の一隊を指揮していると聞いたような人でした。やがて話は当時官憲の追求を受けていた社会主義者の革命家たちのことに及びました。その男がふとなげなしにもら

したある興味ある言葉をご紹介するにとどめておきます。この男はこんなことを言ったのです——『じつのところわれわれはこうした社会主義者や無政府主義者、無神論者や革命家なんて連中のことは、あまり大して恐れてはおりません。われわれは連中から自を離しませんから、そのやり口もよくわかっております。ところが連中のなかには少数ではありますが、いささか特殊なのがまじっております。それは神を信ずるれっきとしたキリスト教徒で、しかも同時に社会主義者という連中です。われわれが誰よりも恐ろしく思うのは、じつはこうした連中なのです。これはじつに恐ろしい人間ですよ！キリスト教徒の社会主義者は無神論者の社会主義者よりはるかに恐ろしいものです』——

この挿話はつまり、有神論者の革命家は梃子でも転向しない、ということを示しているのではないだろうか。私もまた、神を信ずる共産主義者であることを、自負する者である。中山みきが提唱した絶対的な自由と平等を突き詰めるなら、共産主義に行き着かざるをえない、と確信するからである。

私は、「世直し」をめざす宗教には、二大原則を設けるべきだと思う。それは現存する人間を跪拝するべきではないということ（カトリックならローマ法王、真宗なら大谷法主、天理教なら真柱）。また常に地上の権力に意義申し立てをすべきであるということである。

社会主義国ソ連が滅びて世界は資本主義万能の時代が到来した。しかし現在の世界の混迷を見るならば、ソ連が滅びたのは果して本当に正義の賜物であったのかという疑問が湧いてきはしまいか。私に言わせれば、「滅びた社会主義ソ連が全面的に間違っていたのではなく、現在の世界が間違っている」のである。しかしまた、「神」を欠いたイデオロギーがどれほど恐ろしいものかも私達は思い知った。「神」を欠いたイデオロギーは、科学を欠いた宗教と同程度に阿片性を持つことをも、認識しなければならぬのである。科学と宗教の理想的な合一をこそ、今の私は模索している。

全てが変わった (一)

糸川 優

一大変化があった。変化のことをこの会報に書きたかった。が、変化の最中にはもちろん、変化後も、あまりにも大きな変化だったため、自分の中で整理ができなかった。過去と現在を客観視するために、何年もが必要だった。

何からどう書いていいのかわからない。とりあえず、時間的な順を追って、「変化」を説明したい。

一、両親の元で

父は、神学に進みながら、牧師になることをやめたキリスト者で、母はリベラリストである。私が受けた家庭教育、身につけた価値観というものは、おそらく、両親の育った時代と関係があるだろう。敗戦で、世の中の教育や価値観が変化したとき、母（昭和十一年生まれ）ぐらいの世代が最もリベラルになりえたのではないかという気がする。私には、弟がいる。弟には許されている、自転車で行く一人旅以外に、言葉遣いやお行儀といったことが、男女の教育の違いだったが、よく世間でいう「女の子はお嫁にいつて云々」とか「女の子は短大ぐらいで云々」といわれたことはなかった。母のいう、「女が利口でなくては世の中はよくならない」によって、勉強に励むことが求められた。イイ学校にはいることが求められた。しっかりと職業（イイ会社に入るといふことか？）に就くことが求められた。これはしかし、子育てによって、職業を中途で辞めなければならなかった母の、後悔だったのではないかと思われる。ともかく、家庭の中で、女だという理由で何かが阻まれるという経験はほとんどなかったし、学校でも、女であることを残念に思うような経験に就いては思い出せない。人はみな平等だと思つた。みな平等であるべきだし、みな幸せになる権利があると考

えていた。家庭の中でも、学校でも、成績がどうかということだけが問題だった。けっこう「いい子」をしていた。

小学校に入る前後の数年間、「自分の意志で」日本キリスト教団の教会の教会学校に通った。思えばこれが、ひとりでも、誰にも見られていなくても、神に見られている、という意識を持った最初だったのではないか。そして、長い空白のあと、高校生の時に受洗。しかし、これは、神との関係をきちんとしておこう、という程度のもので、悔い改めとか、神に従う、といったこととは無縁だった。人と人との関係よりも、神に見られていたのを期に、福音派に属するドイツ系ミッションの教会に転会した。そこは、私にはけっこう厳しく感じられ、聖日を守る（礼拝のため日曜日に教会へ行く）こと、奉仕すること、「主に頼らなければならぬ」ということをきっちり教えられた。時折は、まいるなあ、と思いつつも、日常の中で、主を選び取っていき姿勢を仕込まれた。そして、婦人伝道師の先生によつて、私のしたいことは、よく阻まれた（勝手にやっていたけれど）。厳しいのは嬉しいことではなかったものの、これだな、という手応えを感じた。私なりに、主に支配されることを望む気持ちがあったのである。

そして結婚……。

（この、独りよがりの独白は、まだ続きます。半生を語る、ということになりそうです。「変化」の何たるかは、ずつとあとになりますので、是非おつきあいください。）

幼児向けビデオの日米比較

齋藤 元子

一九六〇年代の欧米社会では、女性は家庭内で家事や育児に従事し、男性は家庭外で経済活動に携わることで社会秩序の維持のために望ましいとする性別割論が一世を風靡した。一九七〇年代になると、性別割論に対する疑問を学問的に考えようとする動きが起こる。性別分業の発生根拠を生物学的性差のみによって説明することに異議を唱え、文化的要因が強く影響していることを明らかにしようとした試みのなかから、性別割が学習という行為を通じて社会のなかで再生産され、しかも学習は早くも幼児の時から、家族をはじめとして教科書やマス・メディアなどによって常に促されているという事実が示された。

私には現在四才の男児がおり夫はアメリカ人である。日本語英語両方の言語に触れる機会を息子に与えたいという希望から、日本製とアメリカ製の幼児向けビデオ

オを購入している。双方を見比べて強く感じるのは、性役割論に異議が唱えられてから三〇年を経た今日、欧米社会（少なくともアメリカ）においては教科書やマス・メディアが性役割論の推進役を果たしていた時代は終わりを告げたが、日本においては、自覚的ではないにしろ、両者が依然その役割を担っているという印象である。

アメリカの幼児ビデオには多くの場面においてジェンダー・フリーへの取り組み（幼児にジェンダー・ロールを押し付けない配慮）の努力がうかがわれる。いくつか例を挙げてみよう。まずは特定の職業を特定の性に結び付けない努力。例えば警察官はポリスマンではなくポリスオフィサー、消防士はファイヤーマンではなくファイヤーフアイターといったように、名称から男性をイメージするマンを排除している。また男児が従来女性によって多くを占められていた仕事をあこがれの職業に選び、女児がその逆を選ぶといったシーンが、ストーリー展開の中に自然と組み込まれている。一方、日本の幼児ビデオでは「男は仕事、女は家庭」という性役割論のスタイルが随所にみられる。「おうちの中でパパのお城は書斎、ママのお城は台所」といった台詞が平然と語られ、家族がくつろぐ姿として父親は新聞を読み母親は編み物をしている。こういった場面を見せられることによって、家事一切は女性の仕事で

あるというジェンダー・ロールを幼児は自ずと学んで行くことになる。

もう一例として、特定の玩具や遊びあるいは色を特定の性に結び付けない努力がアメリカのビデオには見られる。幼児に自由に玩具や色を選ばせ、女児が率先して野球の試合を提案したり、男児が赤を女児が青や緑を選択する。一方日本のビデオでは選択の場面はほとんどなく、男児には乗り物、女児には人形が予め与えられている。青や緑は男の子の色、赤やピンクは女の子の色というのが自明の理の如くである。

ジェンダー・フリーと並んでアメリカの幼児ビデオに取り組みの努力がみられるのが、人種やハンディキャップを負った人々への配慮である。ビデオに出演している子供は、男女の数にバランスが取れているのはもとより、白人、黒人、ヒスパニック、アジア系と多彩である。歌などに織り混ぜて、スペイン語、フランス語、フィリピン語のタガログ語などの挨拶や数字の数え方が紹介されている。また聴覚障害やダウン症を患った子供らも出演し、健常児がさりげない心遣いを示しながら、遊びや学びを共にしている。特に印象的であるのは、聴覚障害の子供をリーダーにして、リズム体操に手話を取り入れている点である。さまざまに立場の異なる者同士が互いに助け合い、学び合い、理解し合えることを幼児期のころからこのように学習さ

せることはすばらしいと思う。日本では幼児向けの英語学習ビデオは多数あるが、それらは異民族との共生やマイノリティへの思いやりの気持ちや育ませようとする姿勢は感じられない。幼児に英語という言葉や習得させることのみが目的であり、教師役として出演している英語のネイティブ・スピーカーは大半が欧米の白人である。そこには日本人の白人コンプレックス、白人崇拜主義と呼び得るものが明らかに反映されており、アメリカのビデオとは対照的である。

最後に「学ばせる」という行為のとらえ方に違いが感じられる。アメリカでは、これまで見てきたことからもわかるように、玩具や色をはじめとして、幼児にさまざまなものを選択させ、自ら選んだものを使って学んでいく。そして、目標が達成できた時には大いに褒める。かたや日本では、学習の方法はほとんど既に決まっておき、一つ一つの与えられた問題をこなして目標に到達する。しかも最終的に正解が得られなければ罰が与えられる場合が多い。例えば、ある学習ゲームでは川に置かれた飛び石を正解する毎に一つずつ移動し、全て正解すると向こう岸へ渡ることができ、不正解であると飛び石が沈んで川に落とされてしまう。このような罰が登場するビデオは、私がこれまで見た限りでは、アメリカのものにはまったくない。「褒められる」と「正解して当たり前、できなければ罰」とで

は、どちらが幼児に学ぶことの楽しさを教授するのに有効であるか、答えは歴然としていられると思われるが……。幼児期に子供から主体性の芽を摘んで横並び意識を植え付け、罰からいじめを連想させる危険性を孕んでいると危惧するところである。

ちなみに、日米のビデオ価格を比較すると、三〇分程度のものがアメリカでは約一〇ドル、日本では約三千円と三倍近い差がある。内容の満足度を考えると日本のビデオは異常に高いと言わざるを得ない。

人権概念とフェミニズム その二(下)

田ノ倉亮爾

四

次に第二の批判——家族の領域の中に人権をねじ込むことの非についての批判——に対して。

実はこの点については多くの学者によって認められているのである。例えば樋口陽一氏もいう、「ヨーロッパの近代個人主義が家長個人主義として出発し、家が公権力から自由を確保する楯と目されてきたことは、近年、日本でも強調されるようになってきた。一九世紀中葉に至るまでは、家支配権こそが市民的自由の砦とされていたのであり、そのためにこそ、小家族にお

いてもなお夫が家長としての権威を保つべきものとされたのである。……いま家族の動揺のなかで、あらためて、強い個人のフィクションと現実の谷間におちこんだ現代人が帰属集団を求める動きがある。さまざまのかたちでのコミュニティリズムはそのあらわれとすべきであろう。総じて強い個人のフィクションに疲れたところに、近代への懐疑が論ぜられる」(註8)

前述の大沼氏も人権フェティリズム克服の必要を説いていう、「人間の精神的・物質的価値の中には、人権として構成され、法的メカニズムで強制的に実現されるのに馴染まないものも少なくない。肉親への愛、親孝行、他者への思いやりといった諸々の徳は人間が生きていく上で不可欠のものだが、これらは家庭教育や学校教育、地域共同体での人間関係の中で育まれるべきものであり、人権として法的メカニズムにより強制されるべきものではない。真理や美といった価値も、学問の世界あるいは芸術の世界で追求されるべきものであつて、人権という形で求められることであつてはならない」(註9)と。

以上、樋口陽一氏、大沼保昭氏の説は、人権フェティリズムを否定し、何等かのゲマインシャフトを保存すべきであると主張している点において、長谷川女史と同じ立場にいるといえよう。然し、法中心主義と個人中心主義の総合態としての人権の立場を強調するフェ

ミニスト諸姉の主張も保存されねばならない。かくて大切なことは、一方において、人権のレベル(フェミリズムのレベル)を堅持しつつ、他方において主体的共同体のレベルへも参入していくことなのである。かかる主体的共同体のことを、キリスト教においては、教会ともいい、コングリゲーションとも言うのである。うが、仏教においては、僧伽(サンガ)ともいい、あるいは「御同朋御同行」と言っているのである。

五

以上、近代ヨーロッパの自由の人権思想に立つフェミニズムとそれを批判する長谷川女史の説とを、自由概念と家族問題という二つの論点をめぐって考察したが、結論は次の如きものとなる。

第一には、「人権」概念はこの相対化の時代の唯一の原点として堅持すべきであろう。従つてフェミニズムも大いに活躍してよからう。かくて聖典・經典の中に散見する種々な差別文言をばどしどしと摘発していつてよいこととなる。但しこの際、その人権概念は先述のジョン・ロック的な自然権の延長線上にある普遍主義的人権概念であつてはならず、むしろ *intercivilizational* な人権概念でなければならぬであろう。つまり、各自の文明、各自の宗教によつて基礎付けられた人権概念とな

るのである。換言すれば、人権というレベルは、世界中の一切の宗教・哲学等の共存しうる共通の舞台となるのである。この点について、ロジャー・ウイリアムズは、「国家を船に譬えた書簡」の中で既に一七世紀の半において説いているのである。(註10)

第二に、家族問題から明るみにでた共同体に関しては次の如く考えられる。そもそも我等の生活の具体的な姿は、「信仰——人権——共同体」という三契機の弁証法として捉えられるべきではなからうか。

このような三契機の弁証法を考えた理由を述べれば下記の通りである。従来までは二世界説が主流であった、これはキリスト教においても仏教においても同じであった。例えばアウグスチヌスの二王国説、ルターの二統治論、仏教における「真俗二諦」等である。所で二世界説は、聖と俗、出世間と世間、という具合に甚だ簡単明瞭で分かりやすいのであるが、世俗の方がとかく軽んぜられ易い難点がある。現実の差別の問題に直面しても、「それは娑婆のことに過ぎない」と言っているとも簡単に切捨てられてしまう。現実が夢幻の如くなのだから、現実の差別の苦はただ忍従し、「堪えなさい」ということになる。

これに反して、この三段階の弁証法においては、信仰が現実に向かう際に、先ず「人権のレベル」という結節点をもつのである。このレベルにおいて我等

は政教分離、信教の自由を主張し得、或いはあらゆる社会的差別を糺弾しうる立場を得るのである。大木英夫氏は言う「人格における〔からの自由〕から〔への自由〕への過程は、その間に人権という結節点をもつことなしに直結されるならば、人格の自壊を起こすことになるであろう。そこに犠牲愛の危険があることも留意しておかねばならない。ルターの〔キリスト者の自由〕は、この人権という結節点なしに〔からの自由〕から〔への自由〕へと転換したので、その自由の社会的確立をもたらさなかった」(註11)と。この人権の立場はフェミニズムの立場を肯定し擁護しているのである。しかし前述のように、人権フェティシズムに陥ってゲーション、僧伽、「御同行御同朋」のレベルにまで開かれていかねばならない。これが弁証法の第三段階に他ならない。ここにおいて、哲学者・長谷川女史のフェミニズム弾劾論と社会学者(水田・江原・大越・上野教授等)のフェミニズム擁護論とを何とか調停出来たであろうか。その判定は読者に委ねる以外にはなからう。

【註】

8 樋口陽一「二語の辞典 人権」三省堂 一九九六

五二―五五頁

9 大沼前掲書 二九九頁以下

10 ロジャー・ウィリアムズ「国家を船に譬えた書簡」

(久保田保夫「ロジャー・ウィリアムズ——ニューイン
グランドの政教分離と異文化共存——」彩流社 一九

九八 三—三頁

11 大木英夫「新しい共同体の倫理学」教文館 一九九四

下巻 二八六頁

書評

80年代・女が語る

現代女性作家研究会 勁草書房 二千八百円

「イギリス女性作家の半世紀」全五巻の第一回配本
が、「80年代・女が語る」。

このシリーズは五〇年代から九〇年代の女性作家の代
表的作品を「『女の視点』から多角的に検証する」(刊
行のことば)もの。一〇人の作家が取り上げられてい
るが、まず、とても面白い。もう一つこの本は、読む
とすごく元気が出る。作家と研究者が、それぞれ伝統
や社会と渡り合つての成果の作品論であり、両者の真
摯さと誠実さが響き合つて力強いパワーを作り上げて
いるからだと思う。第二章で、宮澤邦子さんが「女性

の立場からの新約聖書の語り直し」と言われる、ミッ
シェル・ロバーツの「野性の女」を取り上げている。ロ
バーツは「わたしにとつて、言葉そのものがフェミニ
ズムだった」と語り、「これまで声を持たなかつた女性
たちに代わつて語ることを使命と感じ、自らの育つて
きた背景とのかかわりの中で、宗教《キリスト教》と
女性のセクシュアリティの問題を真つ向から取り上げ
たいくつかの作品は、激しい議論を巻き起こし」てい
る作家。(日本では、いまだに、キリスト教を看板に
しながら超保守的だったり、僧形なのに陳腐な現状肯
定を書く作家ばかりなのに!)本書では、ロバーツの
言葉で造型された聖書の女性達の人生とともに、黙示
録的なヴィジョンを使つての現代の女性問題への告発、
多くの名を持つ神、など小説の可能性を駆使しての作
品が魅力的に読み解かれ、また、背景の女性神学につ
いても説明されている。(山下暁子)

仏教とジェンダー 女たちの如是我聞

(女性と仏教 東海・関東ネットワーク編、

朱鷺書房、一九九九年)

近年「女性と宗教」が漸く認知されるようになって
きた。従来、「女性と宗教」はせいぜい「宗教と差別」
問題の中の一部門的な扱い方をされるに過ぎなかつた。

そしてその場合、外部の人権や差別問題の専門家が当事者の女性（寺族や坊守など）を代弁し、そのエンパワーを削ぐというまさしく人権問題的な場面もあった。それに反し本書は、様々な形で仏教にコミットして生きる女性たちが、自らの言葉で内在的経験を語った「声」の結集である。これまた性差別する仏教の告発作業かと見る向きもある。しかし実は告発作業を踏まえて彼女たちが目指すのは、仏法に籠められた女性解放の印を読み込むことによる、仏教の「再構築・再創造」である。これは、解釈主体としての女性の「釈尊の教えをそのように聞いた」（如是我聞）という信念からなされる解釈行為であって、いわゆるフェミニスト神学、および「女性と宗教」の趣旨とも合致するものである。わたし自身にとって、これからお寺の世界に入るといふ一般家庭出身の若い女性の心の動きには、感慨深いものがあった。内部に留まり批判の声を上げる女性に対し「不満ならば寺を出ればよい」と言うのはたやすい。だが「寺院の中に踏みとどまり、仏教の未来のために教団を変革する意志を持つことは、単に寺を出るよりもっと改革的であるかもしれない」のだ。他宗教および無宗教の女性と共存していけるお寺についても考えさせられた次第である。（金子珠理）

1999 年会計報告

< 収入 >

繰越	231,238
年会費	242,000
冊子売上	50,616
集会参加費	13,500
<hr/>	
合計	537,347

< 支出 >

印刷費	259,000
通信費	67,590
講師謝礼	27,850
会場費	5,000
文具	1,050
<hr/>	
合計	360,490

現在高 176,858

編集後記

昨年は今までで一番長い失業期間を経験した。貧乏生活には慣れているので、意外に楽しく過ごせた。一番の収穫は、ただでパソコンを習えたこと。今やパソコンでできませんでは、就職は不可能。仕方なく、自分でも貯金をはたいて買った。

一月から外国籍の社長の経営する小さな会社で働いている。三ヶ月間は試用期間。私の前任者は試用期間満了時に解雇になり、今一緒に働いている同僚が二月半ばでやはり解雇になる。私もどうなるか全く予想のつかない状況で、ここところ、寝つきも悪い。なるようになるよと友達に言われ、自分でも言っているのだが、やはりもう失業はイヤだよというのが本音。独身の女が一人で生きていくのは大変だなーと、こんな時思う。次号が出る頃、私はどうなっているかな？

(平嶋三生子)

奥田さんの宗教の性差別の記事を日経で読んだのが九五年一月。すぐ入会するつもりが、迷っていて入会したのは昨年。迷ったのは、信仰を考え直すことは人生全部を考え直すことだったから。マツキノンの「フェミニズムと表現の自由」は、私が人生を「考え直

し、読み直し」するパワーを与えてくれた。偶然か記者は奥田さんだった。やっとの思いで（絶望してたら）自分も世界を読み直してみると、楽しくて良かった！編集会議では編集そっちのけで奥田さんに話しかけてばかりいて、平嶋さんから「よくしゃべるね。頭痛くなつた」と言われた。ごめんね。

(山下暁子)

これまで私たちは主に宗教批判を熱心にやってきましたが、今号は趣向を変えて、批判しながらも宗教を否定しないのはなぜか、という視点で特集を組みました。これは前号の日比野さんの問題提起への応答でもあります。今回は仏教の視点からの原稿が少なく、キリスト教の立場からの発言に偏った感があります。わたし自身は宗教かフェミニズムかの二者択一ではなく、どちらも重要であると考えていますが、この問題についてはいろいろな意見があると思います。是非みなさんの声をお寄せ下さい。福島さんの原稿は前号に間に合わなかったものです。これも二七号への応答です。新しい年となりましたので年会費をよろしくお願いいたします。

(奥田暁子)

Womanspirit No.29

二〇〇〇年三月発行

発行 フェミニズム・宗教・平和の会

連絡先 〒一八〇一〇〇一四

武蔵野市関前五―五―二五

T/F 〇四二二(五三)八七四六

郵便振替 〇〇一七〇一八〇三一

定価 七〇〇円

印刷 (有)オクノプリント社